



中邑あつし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零

【Nコード】

N8602Z

【作者名】

中邑あつし

【あらすじ】

今時、珍しい硬派で正義感の強い不良、柚木太成。

一方、学校では毎日、イジメに遭い、両親には毎日、借金苦に虐待を受け、友達が一人もない相原誠。

柚木太成。相原誠。この二人が出会うとき、物語は大きく動き出す。

そして、舞台は4年後、日本は連続暴力団襲撃事件が世間を賑わせていた。その組織の名はZERO。暴力団は、ZEROに対抗すべく、銃器を密輸入。そして、ZEROを追う二人の刑事、碇と相

良。

「これらが作り出す物語は、ヒューマンサスペンスホラーです。他サイトにも掲載しております。」

1・柚木

人は、どれほどの物を失くすことが出来るのだろう

どれだけ失くせば0になれるのだろう

いつから、ボクの手はボロボロと物が零れ落ち始めたのだろう……

二二三年 七月

「一体どうなってんだ！」

「皆、一斉に動き出しました！ 東京は愚か、北海道、関西、中部、九州！」

「クソッ！ 逃げ！ 手が空いてるものは全員、近くの現場へ迎え！」

「無理です！ 数が多すぎます！」

「構わん！ 行ける奴だけでもいい！」

「駄目です！ 既に現場へ向かってるもので手一杯です！」

「なんとかするんだ！」

「なんとかかって！ どうするんですか！ こ、こんなこと、どうして……」

「何でもいい！ 考えてもどうにもならん！ 取り敢えず、近くの現場へ向かうんだ！」

「り、了解！」

「本当に始めやがった！ ちくしょう。どうなってんだっ！ くそ

つたれえ！」

「碓さん、現場に付きました！ 救援お願いします」

「気を付ける仲川！」

「うわあっ！」

「どうした？ 仲川！」

「どうなってんだ……どうして、持ってるんだ……」

「おい！ どういうことだ！ どうした？ 仲川！」

「何で……こ、こんな……う、うわああー……っ！」

「仲川！ 何があった？ おい！ 仲川！ 仲川ああっ！」

序章

一・柚木

二一九年 七月

暖かい日差しが瞼を重くする。眠くてたまらない。別に寝不足というわけでもなく、今日だって、昼過ぎにここへ来た。ただ、昼の校舎の屋上つてのは、人をどこまでも心地よく眠りに誘う。

「柚木くん。ねえ、柚木くんってば！」

またか……。

自分がこうして一番安らげる時間を、いつも誰かが邪魔をする。

そして、今日はこいつ。

「……………」
無駄だと分かりつつも、今までの心地いい空間からすぐに抜け出せず、柚木は瞼をきつく閉め、全身に日差しを浴びる。だが、無駄なものは無駄だ。ドスッ！

「……………」
声にならない声が出た。

腹部に強い衝撃が走る。昼に食った柏おにぎりが喉元まで上がってくる。

「ご、ごめん。大丈夫？」

自分が思っている以上に柚木が苦しむのを見て、女は慌てていた。その手には、先ほどの凶器と思われる手提げ鞆が両手にあった。

彼女は、両肩に届くほどの黒髪を、夏の風になびかせ、柚木を心配そうに覗き込んでいる。

「チサ、やりすぎだろ」

柚木は、腹を抑えながら声を振り絞った。

「だから、謝ってるじゃん。いつまで寝てるの？ 学校終わっちゃったよ」

全く謝っている態度とは思えないチサの仕草も、ついさっきまでの慌てようを思い出すと笑いが込み上げてきた。

その上、この体制からだど、否応なしに、短いスカートの中の白いショーツが目に入ってくる。痛み分けた。

「なによ、ニヤけて、キモいんだけど」

チサは意表をつく柚木の笑みにバツが悪そうな顔をする。

「いや、てか、まだ昼すぎじゃねえか。もうちっと寝かしとけよ」
「はあ」

額に手をあて、チサが溜め息をついた。

「今日は、学校昼まででしょう。てか、柚木くん、学校に何しに来てるの？ 一回も教室にも来ないで、屋上で寝てるだけ？」

「分かってんじゃない」

柚木の返事にチサはあからさまに呆れてみせた。

「あんたねえ、だかつ」

「落ち着くんだ。ここが、一番」

チサが全て言い切る前に、柚木の言葉が遮った。

「そう」

落ち着くんだ。ここが、一番。そう言った柚木の目が余りにも悲しい目をしていて、チサは言葉を詰まらせた。

チサは、柚木のこういつた部分を放っておけなくて、つい世話をやいてしまう。チサ自信、それを理解している。柚木は何か、他の高校生とはどこか違う場所にいるように感じられた。それは、柚木本人の意思に反して。

柚木に対して相槌しか打てない自分がもどかしい。でも、それは間違っている。自分の場所がどうか、自分で決め付けてしまうのは何か違うし、他人が決めることでもない。

「その、柚木くんは、屋上が一番落ち着く場所かもしれないけど、もっと、もっとたくさん、自分の場所があると思う。だから……」

言いかけて辞める。自分がどれだけ恥ずかしいことを言っているか、柚木のニヤけ顔で現実に引き戻されたからだ。

チサは、これまたあからさまに顔を赤くしてみせた。

「ああ、もう一つあったわ。俺の場所。こいつだ。ツ痛」

柚木は、言い終わると同時に口元の絆創膏を剥がしてみせた。ピリツとした痛みに、屋上の優しい風が柚木の口元を撫でる。

「なんで、そうなの男つて。喧嘩ばつか」

また、あからさまに頭を抱えるチサに柚木は笑みがこぼれる。

「お前には、分かんねえよ。けど、俺、バカだからよ、いろんなゴチャゴチャ面倒くせえの抱えて悩むより、なにも考えず突っ走って殴り合つてると、それが楽しくて仕方ねえ」

まったくろくでもないことを言っている。

殴り合うだの、それが楽しいなど、チサには全く理解できなかった。

それに、今時リーゼントという時代錯誤な柚木の髪型は、それ以上で理解出来ない。

ただ、そう言っている柚木の顔は、とても無邪気で純粹だった。

「鞆、サンキュ」

チサの手から柚木は鞆を受け取ると屋上の出口へと向かう。チサは小走りに後を追う柚木の顔を覗き込んだ。

「アイス。食べたくない？」

これまた、あからさまにニヤけた顔で、チサが突拍子もないことを言うのだ。

「は？」

「アイス。私、バニラがいい」

「俺が金ないの知ってたんだろ」

「いいよ。私が奢ったげる」

「何企んでやがる」

「人聞き悪いこと言わないで」

明らかに、チサが何か企んでいる事が見て取れたが、柚木は、ことさら奢りという言葉に弱かった。

澄んだ空から照り返す日差しと、夏の風が創り出した屋上の心地よさに別れを告げ、柚木は屋上を後にした。

コンビニの駐車場でチサは子供のようにアイスを舐めている。柚木はアイスという気分でもなっかたらしく、缶珈琲を片手に持ち煙草を吸っていた。

「ねえ。煙草っておいしい？」

チサは、柚木の口から出てくる煙を目で追っている。

「美味いって思うときもある。飯の後とか。でも、美味いとか以前に大概が吸わないとやってらんねえ」

「分かんない」

「分らん方がいい。吸わないに越したことはない」

「お金ないくせに煙草は買うんだ」

チサが棘のある言葉で柚木に言う。別に未成年だからとか、そういうのではなく、柚木の現状を考えた上でだろう。

「これは、笹崎から一カートン貰ったやつ。それに、煙草代を浮かしたところで、家の借金はどうにもなんねえよ」

「そうかもしれないけど。お父さん返せなかつたら結局、柚木くんが……」

「メンドクセエの。親父の借金に振り回されんのは。いざとなったら、夜逃げでもなんでもすりゃいいだろ」

柚木がそう言うと、チサがあからさまに俯いた。

左手に持っていたアイスは、既に失くなり棒切れになっている一方、手持ち無沙汰な右手は、膝上のスカートをきつく握り締めていた。

柚木はそれを見て、バツが悪そうにフォローする。

「ああ、まあ、なんとかなるだろ。夜逃げは最終手段だから。その……、てか、お前何かあったんじゃねえの？ 話」

柚木は、屋上での出来事を思い出していた。

昔は幼馴染ということもあり、よく一緒に遊ぶこともあり、家族ぐるみの付き合いも多かった。だが、ここ最近、学校では会話はするものの、一緒に帰るなど久しぶりだった。

「うん、あのね。別に企んでるとか、そういうのじゃなくて、私のお父さんがね、卒業したら家で鍛えてやるからって。それで、その……」

「それで、前原建設で働けと」

「うん。太ちゃん、あつ、柚木くんがよければ、進学も決まってるって言って言ってたし」

太ちゃん。その呼びかけに柚木は懐かしさが込み上げる。

柚木太成（ゆずきたいせい）で、太ちゃん。そして、前原建設の一人娘、前原千紗（まえはらちさ）。

……いつからだろう。チサがその名で俺を呼ばなくなったのは。

「いいぜ」

「へ？」

チサは、この柚木の答えがよっぽど予想外だったのか、間の抜けた声を上げた。

「なんつう顔してんだお前。だから、いいぜ。俺も卒業してから、どうすつか分かんなかったしよ。頭悪いし、それに、ガキんとき、お前の親父の働いてる姿見て、カツコイイとか思ってたしな」

みるみるチサの表情が和らいでいく。

チサは本当に判りやすい。自分で気付いているのかどうか、口に出す前に考えていることが分かかってしまう。

「本当に？ お父さん、きつと喜ぶ」

チサのその大げさな喜びに対し、柚木は、そのむず痒さに悪態をつく。

「鼻水出てんぞ、お前」

「え？ うそ？」

「うそ」

ドス！ チサの両腕からスイングされた鞆は、柚木の腹に、今日、二度目の衝撃を与えたのだった。

2・喧嘩

二・喧嘩

ドカツ！

背中に強烈な痛みが走る。壁に叩きつけられた背中が悲鳴を上げている。相手の飛び蹴りでの衝撃より、そっちの方が致命傷だ。

「これで終わりじゃねえだろ？ 柚木」

背中 of 痛み に耐えながら、相手を睨み返す。

柿原宗一（かきはらそういち）。清領高をシメている。百八十七センチ近くある身長と、やけに老けたその顔付きは、まるで同じ高校生とは思えなかった。

柚木と柿原の喧嘩はこれで五度目。四勝一分。

喧嘩にも、いろいろな理由がある。派閥争い、誰が一番強いか、仲間がやられた、等。柚木には、この喧嘩がどんな理由かなど分からない。

いや、理由など興味がなかった。ただ、喧嘩する度に強くなっている柿原と喧嘩するのが楽しくて仕方ないのだ。

「バカヤロウ。喧嘩の最中に喋ってんじゃねえよ」

川原に柚木と柿原が腰掛け、柿原が煙草に火を付けた。

互いの制服は所々が破れ、互いの顔は見れたものじゃない。柚木の自慢のリーゼントはやる気なく頂垂れ、柿原の左目は視界を遮るほど腫れ上がっていた。

川の流れは穏やかで、茜の夕日が、川に斑なオレンジ色の光を彩っている。時折、風が傷口を撫で、心地よい痛みが柚木等を包み込む。

「おい、煙草一本くれよ。柿原」

「は？ テメエの吸えよ」

「持ってねえんだ。俺が勝ったんだ。敗者は、煙草一本くらい献上しろ」

柚木の言動に、明らかに柿原が怒りを覚えている。

「テメエ、頭イカレちまつたんじゃねえのか？ 勝ったのは俺だ。先に氣い失つたのはテメエだろうが」

「先に立ち上がったのは俺だ。それに、お前がもう動けないと分かったから、俺は寝ただけだ」

「んだとお！ もう一回やっか？」

「メンドクセエ」

「またそれかよ。ちっ、ほらよ」

馬鹿らしくなったのか、柿原は柚木に煙草を差し出した。

「サンキュ」

柚木は、煙草を啜え、顎を柿原に突き出した。

「ん？」

「火」

柿原の顔に怒りが露になる。

「テメエ。ナメてんのか」

「火、持ってねえんだ」

「ちっ、分あつたよ。テメエで付ける。」

柿原はバツが悪そうにライターを差し出した。柿原はなんだかんだと言つても面倒見がよく、後輩達からも慕われている。柚木は、そういつた柿原を男として心から尊敬していた。

「よお、最近、清門高の噂知つてつか？」

柚木が煙草に火を付けたのを確認すると、突如、柿原が思い詰めた顔で問掛けてきた。

「噂？ よく分かんねえけど、清門高の奴ら、最近、幅利かせてんのか、ウチのもんが何人かやられてる」

「お前んともか。清門高に寺田つてのが転校してきたらしいんだが、そいつがヤベエらしいんだわ」

「ヤベエって、強えのか？ 珍しくヘタレてんじゃねえか」

柿原がらしくないことを言うので、柚木は悪態を付いてみせる。だが、柿原は、意外に悪態に噛み付きもせず語り始める。

「いや、なんか、違うんだ。その、なんつっていいか、俺らガキは、頭悪いし、喧嘩しか能がねえかもしれねえ。でも、それでも、シガラミだらけの大人になる前に、ガキのうちしか出来ないこととか、拳ひとつでどこまでいけるかとか。下らねえかもしれんけど、そういったもんだろ？」

そりゃあ、頭に血い昇って刃物だしたり、下手したらイカれたヤロウが人を殺したりすることもある」

柿原が、頭悪いなりに何かを伝えようとしているのは分かるが、柚木自信、頭が悪いため、柿原が何を言いたいのかうまく伝わらなかつた。

「で、結局、何が言いたいんだ。その寺田つてのが誰か殺つたのか？」

柚木は答えを急いだ。柚木にしてみれば、柿原が結論を先延ばしにする理由が解らなかつた。

「いや、寺田自信は何もしていない。いや、何もしていないこともないか」

柿原の言動に柚木は、ますます訳が分からなくなる。

「どつちなんだよ」

「わりい、何つっていいか、そいつは、直接喧嘩もしなけりゃ、表にも出てこないらしんだ」

「なんだそれ。そんなん、ただのイモじゃねえか。そもそも、寺田なんてホントに居んのかよ？」

「ああ、全くだ。俺も、寺田つて奴が本当に居て、表立ってくれりゃ、どんなヤバイ野郎でも、ぶち噛ましてやるんだが。まるで、実態が掴めやしねえ。それに……」

聞けば聞くほど、柿原の言っている事が理解できない。柚木の頭は、複雑な事に追いつける程の思考を持ち合わせてはいなかつた。

というか、柚木にとって寺田の存在が居る居ないは、どうでもよかった。なんだかんだと、清門高をシメてしまえば、それで済むと考えていた。

「それに？」

柿原が、何か言いかけていたのを思い出し、柚木は続きを促した。「どうも妙なんだ。ウチの奴等は清門高にやられたつつつた。でも、奴等が着ていた制服は大滝高だったって言うんだ」

急に辺りの空気が張り詰めた。いや、辺りの空気が張り詰めたのではなく、柚木自身が動揺し、そう感じたただけだ。

「どういうことだ。ウチの高校じゃねえか」

「ああ」

訳が分からない。大滝高の制服を着ているのなら、何故、清門高にやられたなんて。

そもそも、自分の高校の者が清領高に手を出すはずがない。いや、それは間違いか。大滝高と清領高はもとも仲が悪い。だが、だからこそ、大滝が清領に手を出したら、それが自分の耳に入らないわけがないのだ。

柚木は訳が分からないながらも、柿原の言ったヤバイ、その空気を感知始めていた。

「お前の疑問は分かる。制服がテメエんとこだから、テメエが絡んでると思っていたがどうも違うらしい。それに、テメエんとこの制服来た本人が自分は清門のもんだと言ったらしい」

胸糞悪い。ムカついたから殴る。テツペン取るために喧嘩する。

それは、そういった単純なものじゃない。

……なんか、ドロドロしてやがる。

「マジ、訳分かんねえ」

柿原はかまわず続ける。

「俺は、始めはテメエんとこが清門に下っちまっただって思った」

「んあ？ んな訳ねえだろ」

柿原が、予想外なことを言うので、柚木は苛立ちを隠せない。だ

が、冷静に考えれば柿原がそう考えるのが自然なのだ。

「まあ、一本吸えや」

柚木に対し柿原は冷静だ。場を見据えている。頭に血が上っていた柚木も冷静さを取り戻し、煙草に火を付けた。

そして、それを見届けてから、柿原はゆっくり続きを語りだす。

「ところがだ。次は、ウチの制服着てるもんが清門の名を語ってるのを見た奴がいてな。そいつにやあ、俺も驚かされたってわけよ」

「で、どうなつてんだよ？ ああ？」

イライラする。ついさつき、冷静になったはずなのに。

柚木はどうしようもないイライラを柿原にぶつけた。自分に対し冷静な柿原が、余計に自分をガキの様に感じさせてしまうのだ。

「そう、突っかかるな」

以前、柿原は冷静だ。ますます自分が小さく見え、柚木はただ、ぶつけようのない怒りを、川面へと石を投げつけた。

「で、俺なりにいろいろ調べたんだ。そこで、少しずつだが見えてきやがった」

柚木は、口を挟むと結論が遠ざかることを覚えたのか、黙って聞いている。

「金だよ」

「金？」

金。嫌な響きだった。柚木の周りには何かとそれが付き纏う。柚木は金の持つ怖さ、汚さを、身をもって知らされていた。柚木にとつての喧嘩はそれを忘れるための手段に過ぎないのかもしれない。

「そう、金。寺田は、金で人を動かしている。清門だけに限らず、他校も巻き込んで」

虫酸が走る。内臓が擦れる感覚に襲われる。

金で苦しんだ分、金の怖さを知っているからこそ、柚木は金持つの絶大な力も知っている。金で人の心を動かすことが出来るのか？

答えはYESだ。全ての心、全ての人が金で動かされるといいうわけではないだろう。だが、現実、大概のことは金で人は動くのだ。

この街では、負け知らずの怖いもの知らず、最強を誇る柚木太成でも金の力には憤りを感じるほかなかった。

「で、その寺田の野郎は金使って人集めて、何がしたいんだ？」

「分からん」

「なっ？」

ここまで、話しておいて分からないのでは、結局、結論なんて出ない。

「俺は神さんでもねえし、寺田の評論家でもねえ。ない頭絞って、ここまででは調べたんだ。バカにこれ以上期待するな」

柿原の言うことは最もだ。柿原が寺田のことを調べていた時、柚木は周りに目もくれず、ただ、喧嘩し、はたまた校舎の屋上で昼寝をしていた。そんな柚木が、柿原に全てを求め、苛立ちをぶつけるのはお門違いなのだ。

「まあ、寺田って野郎が何か企んでんのは間違いない。テメエもそれ肝に命じて用心するこつた」

柿原は、たまに親父くさいことを言う。だが、柚木は、柿原のこつたところを憎めないとも思うのだ。

「じゃ、俺、帰るわ」

そう言つと、柿原は、手を後ろ手にひらひらさせ、単車に跨ると、低い排気音を川原に響かせ帰路に向かった。柚木は、ただそれを眺め、柿原の姿は次第に無くなり、単車の低い排気音だけが遠くで聞こえている。

「ちっ、俺の場所がまた無くなつちまつたじゃねえか」

柚木にとって仲間、喧嘩といった自分の空間が、また、金によって奪われた気がして、ただ、その場で立ち尽くすしかなかった。

『その、柚木くんは、屋上が一番落ち着く場所かもしれないけど、もつと、もつと、たくさん自分の場所があると思う。たくさん。だから』

「……なんで今、
テメエが頭ん中にいんだよ。
」
「笑けてくらあ」

3・金

三・金

夕暮れ時、五月蠅いほどの蝉の声は、まだ帰路へ響きわたっている。時間の経過と共に夜が訪れ、次第に蝉の声は、涼しい夏虫の声へと変わるだろう。

昨日、雨が降ったためか、湿度を残した空気は、身体にジメジメと纏わり付いてくる。制服のカッターシャツが地肌に張り付き、気持ち悪さを際立たせる。

歩き慣れた帰路。もう、高校の登下校を繰り返すこと二年半、馬鹿でも歩き慣れる。家に近づくほど、それは増すばかり。増すばかりのはずだ。しかし、ということが、家に近づくほどに吐き気が込み上げてくる。

いい加減、慣れて欲しいものだ。家が安らげる場所というのは、一体どんな気分なのだろう。少なくとも自分の場所は家にはない。シガラミにまわりつく大人にはなりたくない。出来るなら、一生ガキのままでもいいくらいだ。だが、家に近づく度に、大人になったら、こんな家からさっさと逃げ去りたい。いや、この街から。なんてことを考えてしまう。

『あたしのお父さんがね、卒業したら家で鍛えてやるからって』
『本当に？ お父さん、きつと喜ぶ』

……またこいつか。俺の頭ん中に湧いてきやがる。

分かっている。自分がこの街から出て行けないことも、夢を追うには、自分の環境がそれを許してくれないということも。

小さな街に嫌気が差し、ここではないどこかでと夢は視るものの、

柚木自信、この小さな街の社会に食い潰される、ちっぽけな一人の人間に過ぎないのだ。

金かえせ！

借りたものは返しましょう。

柚木さんは人のお金を返せない非国民です。

ここの住人は人のお金で生きています。

死んでも構わないので、お金を返してください！

くたびれた一階建てのアパートの片隅に、落書きやら張り紙でありったけの罵声がアパート一帯を埋め尽くしていた。窓なんて、張り紙だらけでその役割を果たせていない。

そして、ドアの前には、スーツ姿のいかにもそうな男が二人。二人の足元には、数本の煙草の吸殻が散乱している。その時間の経過が、金に対するこの者等の執拗なほどの執着ぶりを、柚木に否応なくも痛感させるのだ。

髪をオールバックにした、紫のスーツを着た男が口に煙草を咥えると、すかさず、グレーのスーツ姿で細身の男が、それに両手で火を付けた。二人の上下関係がハッキリと伺える。

「またか」

当然、予想していたことに柚木は頭を抱えた。

「おかえりい。太成ちゃん」

今時、昭和を感じさせる紫のスーツを着た男が、猫なで声で柚木に詰め寄ってきた。

「太成ちゃん、君の親はいつだったら家に居るのかな？」

「知らねえ」

「んだと？ コラ！ テメエ、口の聞き方……」

「まあまあ」

柚木の態度が気に食わないのか、細身の男が食ってかかってきたが、猫なで声の男がそれを割って宥めた。

「しかし、佐伯兄」

細身の男は、バツが悪そうに佐伯とかいう男に場を委ねた。

「太成ちゃん。どうせ、お父さんは居留守使ってんでしょ？ お父さんが駄目なら太成ちゃんでもいいからさあ。三百万、返してくんない？」

猫なで声が妙に鼻に付く。ジリジリと、胸の奥の方から厭らしいプレッシャーが押し掛ける。

「俺が払える訳ねえだろ」

と、瞬間、佐伯は柚木の胸ぐらを両手で掴み上げ、顔を歪ませ、佐伯の声がドス黒いものに変わる。

「払えねえじゃねえ！ 払うんだよ！」

このギャップの使い分けが、人を恐怖に駆り立てるのに効率が高いのを佐伯は経験から身に付いていた。

柚木は構わず佐伯を睨み返す。

「威勢がいいねえ。ウチの組に欲しいくらいだ。テメエ、この辺じや、幅あ効かせてんだろ？ カツアゲやら上納金やらで金集めりゃ済む事だ。なんなら、ステッカーぐらいは作ってやる。それ、一口十万で売って来いや」

「分かった。分かったから、もう帰ってくれ。ステッカーは要らない。金はカツアゲでもして集める」

何も分かってはいない。金を返す気などさらさらなかった。

……もう、メンドクサイ。

取り敢えず、この状況の打開に、柚木は従ったふりするしかない」と結論付けたのだ。

「おう。太成ちゃんが物分かりのいい子で助かるよ。また来るからな」

そう言うと、佐伯は、細身の男を連れ去っていった。

「クソッ！」

ぶつけようのない悪態を付き、柚木は玄関のドアを開けた。

真っ暗だ。部屋の電気を付けても誰も居ない。父は本当に居なかった。

……クソ親父。どこに行つてやがる。仕事か？

最近、父は夜も仕事をしているらしく、ほとんど家に居る事がなかったが、柚木にとってそれは気が楽でもあった。

大体が、柚木が家族との馴れ合いなど出来る柄ではなかった。それ以前に、この状況じゃ馴れ合いどころではないのだ。

母が生きていた頃は、羽振りもよく、父の人一倍筋肉質でガツチリとした体型は、誇らしくもあり、憧れさえ抱いていた。

昔から父は無口で余り喋らなかつたが、今は、それが何を考えているのが解らず、無性に腹が立つ。

テーブルには、カップ麺がひとつと、置き手紙。

いつも、こんな飯ですまない

「クソッ！」

柚木はただ、憤りを口の中に麺と同時に放り込んだ。

4・笹崎

四・笹崎

蒸し暑い。ジワジワ全身に汗が滲み出しているのが分かる。それでも、ここで、暑い日差しを浴びて過ごすことはそう悪くない。時折、通り抜ける風が体の汗を冷やし心地いいくらいだ。ただ、突き刺す程の日差しが瞼の裏側まで焼き付いてくる。次からは、日除け変わりになる物を持ってこようかなどと柚木は思った。

「柚木。おい、柚木」

……そろそろかと思った。

柚木には、この場所で寛げる時間は無いらしい。

夏のジリジリとした暑さもあつてか、または、腹部への強烈な衝撃に懲りたのか、柚木はすんなりと腰を上げてみせた。

「んだよ」

腰を上げると同時に相手の顔を見上げる。そこには少し切迫した面持ちの笹崎光一（ささざきこういち）の顔があつた。

「やられた。次は充が。また、清門の奴らだ」

正直驚いた。清門がまた何か仕掛けてくることは予想出来ていた。既に、柚木の学校の生徒も数人やられている。他校も巻き込み、その数は数えきれない程だ。

しかし、笹崎の言う充は藤井充（ふじいみつる）。喧嘩の強さは柚木に引けを取らせないくらいなのだ。

「マジか。そんな時の状況分かるか？」

笹崎は、少し落ち着きを取り戻し、頭を整理しているようだった。「ああ、あいつ、今、藤崎病院に入院してる。そこで、やられた時の事を一緒にいた甲斐に教えてもらった。

相手は数人だったらしい。商店街を甲斐と二人で歩いてる時に後

るから。鉄パイプで頭割られてた。徹底的だったってよ。その後も」
余程悔しいのか、笹崎の右手は、爪が突き刺さる程強く握り締められ、顔は、歯を食いしばり、クシャクシャに歪ませている。

「甲斐は？ 何してたんだ」

「数人のうちの一人を相手にしてたらしい。どうやら、連中、甲斐には目もくれず、充に集中攻撃してたらしく、甲斐も止めに入ったんだろうが、あいつ、喧嘩弱えし」

「元々、充は狙われてたって訳か」

「いや、それは多分違う。奴らは元々、手当り次第だ。たまたま、その場に居合わせたのが充で、奴らの中に充を知ってる奴がいた。まあ、ここいらのガキだったら、充のことは皆知ってんだろ。……あいつの強さも」

嫌な予感が柚木を支配していく。突き刺す程の日差しを浴びているというのに、背中には、異様な寒気が走り、冷や汗が滲み出しているのが分かる。

「だから、充が集中攻撃された」

「ああ」

笹崎は、力なく相槌を打つ。

何か腑に落ちない。何かは判らない。だが、どうも笹崎の話に違和感が拭えないのだ。

…… 奴等は一体何がしたいんだ。

「柚木、奴らのことを清門で括るのはやっぱり違う気がする。制服、バラバラだったってよ」

虫酸が走る。奴等のことがますます解らない。

制服がバラバラということは、新しいチームか何かなのだろうか。この街にも、チームやら族はいくつもある。だが、何故、次々と襲い来る奴等は、清門を語る必要があるのだろうか。

…… 全く分からねえ。

柚木は何かあれば、大概は拳で片していた。難しい事は頭のキレる充が熟していたからだ。

柚木と充、そしてチサ。この三人は物心付く前からの幼馴染だ。充は、勉学に勤しむということは無かったが、頭が良く、冷静に物事を捉え、皆から慕われていた。

「考えても仕方ねえ。どうも、俺は頭使うのは苦手だ。やっぱ、俺は体使うのが一番だ。取り敢えず、充の見舞いでも行こうや」

二つ返事で合意を求めた柚木に対して、笹崎は俯いたまま、その場を動かこうとしない。

「どうした？」

「面会謝絶だ。充は今、緊急手術中だ。頭割られてんだぜ。最初の後頭部への一撃で充はもうオシヤカだった」

内蔵が鷲掴みにされる錯覚が襲った。血の気が引いていくのが判る。先から嫌な予感はしていた。ただ、笹崎から直接聞かされるまで、頭がそれを受け入れようとしなかった。

自分の置かれている状況は、もう不良のレベルを超えている。喧嘩の最中に角材、バット、鉄パイプが使われるのは珍しいことではない。だが、いくら不良でもなるべく頭は避ける。

いや、何より最初に後頭部を割られて、もう動けなくなった相手に、数人で袋叩きなど常軌を逸している。

この街全体を取り巻き一連の騒動により、人の生死が関わることになるとは、柚木は露とも思っていなかった。

一旦、嫌な予感を受け止めると、頭に次々と不穏なことが思い浮かばれる。

「クソッ！ とりあえず病院だ。大丈夫なんか？ 充は？」

柚木は居ても立っても居られず、病院に向かおうとする。

今は喧嘩とか清門がどうかより、柚木は、今の充の容態が気掛かりでならなかった。

「判らない。家族でもない俺が医者に聞く余地なんてないんだよ。かといって、充の両親は、俺らの事を目の敵にしてやがる。今は、病院には行かない方がいい」

一刻も早く、充の容態を知りたい柚木に対し、笹崎は、柚木が病

院に行くのを引き止めた。充の両親は、柚木等を拒絶していると言
うのだ。

……クソツ。せめて、命に別状あるかどうかさえも聞けないのか。
柚木は人の親というのが苦手だった。世間体やら、何やら、子供
を自分のステータスと思っている親が多過ぎる。近所の子と自分の
子を比較し、手に負えなくなれば、全てを学校や友達、他人のせい
にして子を押し付ける。

といつても、自分の一人息子が大変な目に遭っているのだ。この
場合、どんな親だろうが、いつも、一緒にいる不良の悪友等を良く
思わないのは当然なのだろう。だが、奴等は不良や真面目な奴、そ
ういった者を見境なしに襲っているのだ。

……もし、充が俺等とツルンでなかったとしても……、クツ、俺
も大人達と何も変わりやしねえ。どこか自分のせいじゃないと責任
逃れただけだ。結局、自分も汚い大人と一緒になのか……。

「チツ、誰も充の容態は把握出来ねえのか」
「いや、今はチサが病院に居る。容態は後でチサに聞けばいいだろ
う」

「そうか。充のことはあいつに頼るほかないな。甲斐は？ あいつ
は今どこにいるんだ？」

「警察だ。事情聴取つてやつ」

警察が動き出している。事態はますます、都合が悪い方向に事が
運んでいた。

「笹崎、サツがケリ付ける前に、俺等で充のカタ取るぞ」

「取るつて、どうやって？」

「殴り込みに決まってるんだろ。清門だ！」

5・寺田

五・寺田

柚木も、充がやられるまで何もして来なかった訳ではなかった。柿原から、寺田について聞かされていた事もあり、清門高の制服見つけては、寺田の事を聞いてまわったが、誰も口を割なかった。それどころか、自分の高校で起きている事を、まるで把握出来ない者等までいるのだ。我、此処に在らず。という感じだ。

……どうなつてやがる。そもそも、制服がバラバラなら、清門を問い詰める事自体がズレているのか。

柚木が何とか一連の騒動について聞き出せたにせよ、確信には何一つ繋がらなかった。それもあつてか、彼はこの件に対して根本的なズレを感じ取っていた。ただ、必ずといって、背景には寺田の名前が出てくるのだ。

充は、手術は終わったものの、相変わらずの面会謝絶。甲斐は事情聴取の後から、学校にも来ず、家に引き籠っているらしかった。無理もない。彼は元々臆病だ。目の前で友人が殺されかけているのを見て畏怖してしまつても仕方がなかった。

……奴は何者なんだ。一体、何をしようとしてる。

柚木は寺田に対し、僅かながら恐怖を感じ始めていた。それ以上に、これ程の憎悪を覚える事が今まであつただろうか。まして、その相手の実態がまるで掴めないのだ。

昼休みの校舎の屋上で、柚木は柵を背もたれに腰掛け、右片膝を曲げ、その膝に右肘を置き、その手で両コマカミを押さえ付け訝しい表情を造っている。一方、その横で笹崎は柵に腕を掛け、煙草を噴かしていた。

屋上のドアが開けられると、背が小さく坊主頭の男が、柚木等の方へ歩み寄って来た。その頭には、右側面に二本のライン、左には一本のラインが入っており、左眉にもまた、二本のラインが入っている。

「柚木さん」

「シゲか」

シゲ、前田重晴（まえだしげはる）は、一つ年下の後輩で、人付き合いが良く人脈もあるため、こと、情報収集においては得意分野でもある。柚木に煙草を一本差し出すと、柚木の隣に腰掛け、続け様に喋り出す。

「寺田の事なんすけど、金で人動かしてるって噂は知ってますよね？」

シゲはまず、そのことを知っていなければ話は進まないとばかりに柚木に伺った。

「ああ、知ってる」

「その金なんすけど、この金の受け渡しも奴等は、直接寺田の手からは貰ってないみたいなんです」

どおりで中々姿が出て来ない訳だ。騒動を起こしている当人達自体、寺田の姿を見ている者はほとんどいなかった。

柚木が事の次第を把握しているのを確認すると、シゲは続けて話し出す。

「まあ、要するに、寺田と奴等を金で繋ぎ合わせる仲介人が居るって事です。まずは、そいつを突き止める事が先決かと」

それは間違いはない。この仲介人なら、寺田のことを間違いなく知っているはずだ。だが、またこの仲介人に辿り着くまでが、まどろっこしくて仕方がなかった。

「柚木さん、前に清門を問い詰めること自体がズレているのかわかってましたよね。たぶん、それは間違いじゃないと思います」

「じゃあ、清門に殴り込みを掛けても無駄だって事か？」

「はい。というか、既に清門高を直接潰しに掛かった奴等がいるん

です。この一連はそもそも、うちと清門だけの抗争じゃありません。うちの大滝高や清領高、那賀峰高、田口西、田口北、族の竜騎閃りゅうきせん海窮連合かいきゅうれんごう。これだけじゃ収まりません。奴等は俺等みたいなガキに限らず、無差別に事を起こしています」

寺田は、これだけの奴等を敵に回して、何を企んでいるのだろうか。事の大きさに対し、その目的が全く解らないのだ。

「俺の知り合いが田口西高に居て、そいつ、竜騎閃にも入ってんですが、その、好もあって、田口西、竜騎閃が協戦して、清門に殴り込みに行ったらしいんです」

「それは、俺も初耳だ。で、どうなったんだ？」

それには、余程意外だったのが、聞き手に徹していた笹崎が身を乗り出す。

「どうもこうも、清門は誰も戦おうとしないんですよ。寺田の影すら見えず、清門の奴等を殴ろうが蹴ろうが、すみませんの一点張りです。」

元々、清門は弱小高ですから。それで、田口西、竜騎閃も何も得ず、引くしかなかったんです。皆、煮え切らないといった感じで」

シゲはお手上げといったふうに手を上げてみせる。

柚木が清門校の生徒に聞いた時と同じだった。結局、清門に直接殴り込みに行こうが、何も解らないのだ。

……八方塞がりか。こうしてる間にも警察は動いてやがる。どうしたらいいんだ。

事は次第に大きくなり、その被害の数も増えているのに対し、柚木は、寺田に対する手掛かりも、それを見付ける手段も思い浮かばない。歯痒い。苛立ちが抑えきれない。怒りが込み上げるも、ぶつける相手がいない。姿を見せない寺田が憎たらしい。その仲介人ともやらも、金で動かされている者等も。

「とにかく、これからも情報は当たれるだけ、当たってみます。」

くれぐれも、柚木さん、笹崎さんは一人で出歩くのは避けて下さい」

柚木の奇立ちを察したシゲは、情報を調べ上げ、彼に出来るだけ早く伝えてやるのが先決と判断した。

「分かった」

シゲが凄く頼り甲斐ある奴に見えた。柚木はシゲのそういった部分に嬉しさを感じつつ、後輩に頼って何も出来ない自分が腹立たしくなるのだった。

6・充

六・充

柚木は、いつもの校舎の屋上にいた。いつもの様に昼寝を決め込もうするが、頭の中にドロドロと流れ込む思考のせいか、なかなか寝付けやしない。時間の経過さえもよく把握出来ないほどだ。

陽はいつの間にか落ち、校舎から見える空はオレンジ色になり、街並みは群青の影を造っている。昼と呼ぶには程遠かった。

ピピピピ。耳障りな携帯の音が耳を打つ。

「もしもし」

「……………」

「おい、もしもし」

「充が……、死んだ……………」

ゴツ！ 左頬に鈍い痛みが走る。

「何しに来た。お前等が充を殺したんだよ。たった一人の息子なんだ！ 息子を返せ！」

顔をシワクチャにしながら、充の父親は柚木に殴り掛かった。

殴られる事に関しては慣れている。慣れてはいるが、十数年生きてきて、人に殴られる事がこんなにも痛いと感じたのは初めてだ。内側から言いようのない痛みが込み上げてくる。

「お父さん、辞めて。葬式中に」

充の母親が父親を止めに入った。決して、柚木を庇うために父を止めた訳ではなかった。

「すみませんけど、出て行って下さい。判るでしょ？ ここは貴方達のいていい場所じゃないの」

母親の顔は酷く糞れ、化粧がその役割を果たせていない。どれだ

け泣き腫らしたのだろう。化粧で隠しきれない程に、目の周りは腫れ上がっていた。

「なあ、返してくれ。充を返してくれよう……」

物凄い形相で柚木の胸ぐらを掴んでいた父親の顔に力はなくなり、柚木に縋り付く様に父親は膝を地に落とした。

「すみません……」

何に對してのすみませんなのか判らない。ただ、責任は感じていた。もし、充が生き返る事が出来るなら、変わりに自分の命だつてくれてやる。死ぬ事なんて全く怖くない。自分の死の代価が充の命になるなら、喜びさえ覚える。

だが、結局、何も出来やしない。自分の無力さの憤りをただ、すいません……としか言葉に表せなかった。

「せめて、線香だけでも上げさせて貰えないでしょうか？」

隣にいた笹崎が視線を落とし込み父親に尋ねた。

「母さんの声が聞こえなかったのか？ 出てってくれ」

「でも……」

「出て行けっ！」

間髪入れない父親の言動に、柚木達は従うしかなかった。

葬式に参列させてもらえなかった柚木等は、肩を落とし、昼下がりの帰路を辿る。

言いようのない悲しみと悔しさで身体中が強ばる。次第にそれが言い表せようのない憎悪に変わっていく。握り締めた拳の中は汗が滲み出し、自分が今、どんな顔をしているのか判らない。

余程な顔をしていたのか、笹崎が柚木の顔を見て驚いていた。

「寺田だ。許せねえ。笹崎、何としてもあいつを見つけ出すぞ」

「……もう、辞めよう。俺はもう降りるよ」

一瞬、笹崎が何を言っているのか解らなかった。

「何言っただ」

「もう、辞めようって言ってるんだ」

「だから、何言ってるんだ。充が殺されたんだぞ」

怒りが自分の声さえも震わせている。顔の筋肉がコントロール出来ない。頬はヒクヒクと吊り上がり、顎はガクガクと上下する。

「だからだよ！ もう、俺等の手に追えるもんじゃない。甲斐だつてオカシクなつちまうし、大体、寺田つてどこに居んだよ！ もう、怖いんだ。嫌なんだよ！ もう！ ……警察に任せよう。それでいいだろ？」

笹崎は、体を震わせ怯えていた。柚木は愕然とした。笹崎のこんな姿を見るのは初めてだった。それでも、やはり納得がいかない。

……ダチが、仲間が殺されてノコノコと引き下がるような奴だったのか。もし、殺られたのが笹崎だったとして、充なら絶対俺と同じ事を考えるはずだ。寺田を放っておいちゃいけない。

「分かった。テメエは家で大人しくしとけ。他の奴等とで寺田は何とかする」

「無駄だ。他の奴等も一緒だ。雄二や楠木等も。もう、この件には手を引きたがつてる」

「どういうことだ。お前等、悔しくねえのかよ！ このまま、引き下がるわけねえだろ！」

「どうもこうも、皆、お前みたいに強くねえんだよ。そりゃあ、お前や充の強さに憧れて慕ってる奴もたくさんいる。その充も殺られちまった。腕っ節だけじゃない。周りの嫌な出来事、物事を抱え込めるほど、俺等は強くないんだよ」

「そうか……」
それしか言えなかった。自分と仲間との間の意思の違いに対し、ショックを隠せない。

柚木にとって、仲間はこうであるべき、自分と同じだと思い込んでいたに過ぎなかった。本当に仲間のことを思うのなら、笹崎の言う通り、この件は、仲間を巻き込まず、そつとしておくべきなのかもしれない。

「じゃ、俺こつちだから帰るわ」

言つと、笹崎は路地の角を曲がり歩き出した。

「笹崎」

「ん？」

「すまん」

「らしくねえ」

片手をひらひらさせ、笹崎は帰路に付いた。

家に帰る気も起こらず、どれくらいの時が経過したのだろうか、暗くなり始めた公園のベンチで一服する。始めこそ、子供等が駆け回り、無邪気に遊ぶ姿が見受けられたものの、今はベンチに柚木一人が取り残されていた。

公園に来るのはいつぶりだろう。この歳になると全く縁がない。小学生の頃を思い出す。あの頃は、自分と充とチサ、いつも三人一緒だった。

「ここにいたんだ」

葬式が終わったのか、そこにはチサの姿があった。彼女は柚木の隣に腰を掛け、自分の膝を見つめ、何か思い詰めたような顔をしている。チサもさつきまで泣いていたのだろう、目が赤く腫れ上がっていた。

「変なこと、考えてないよね？」

「変なことって？」

「寺田って人のこと。もう、太ちや、柚木くんまでいなくなっちやうのは嫌だからね」

チサまでが柚木を止めようとする。

チサのその両手は、カ一杯スカートを握り締めていた。柚木を思つてのことなのだろうが、柚木は寺田の事から手を引くつもりはなかった。

「太ちやんでいい」

「太ちやんは、いなくならないよね？」

「いなくなるわけねえ」

「だったら、もう、寺田って人の事、探るのは辞めて」

「俺があいつのこと探るのを辞めたところで、奴は無差別に人を襲ってる。危険なのは変わりない」

その通りだ。このまま放っておけば、チサにまで危険が降り掛かる可能性だってある。

「それでも、それでも辞めて。後は警察が何とかしてくれるはずだから。充くんも、きつと生きてたらそう言うと思う」

……充が、そんなこと言うはずがない。

柚木は誰よりも充の事を知っているつもりだ。だが、同時にチサは、柚木、充、二人の事を誰よりも理解していた。柚木は、彼女が何故そう思うのか、どうしても納得出来なかった。

「警察なんかには任しておけるか。大体、充が生きてたら俺を止める訳ないだろう」

「うっん。充君ならきつと止める」

きつぱりとチサは言ったのけた。その目線は公園の中央にあるが、どこか遠くを見ている様に見えた。

「太ちゃん、覚えてる？ あの時のままだね、滑り台。」

小学生の時さ、太ちゃんが滑り台の下に大きな蜂の巣を見付けて、公園の平和は俺が守る！ なんて言っつて、棒切れ持っつてさ。私は怖くて、泣いて太ちゃん止めたんだけど、太ちゃんは俺に任せろ。なんて言っつて」

なんとなく覚えている。いや、チサの話を聞いて思い出してきた。「それでさ、太ちゃんその棒で蜂の巣叩き落とすんだけど、その後が大変。落ちた巣からいっぱい蜂が出てきて、私は、遠くで泣くことしか出来なかったけど、太ちゃんは、蜂に刺されながらも棒で蜂と戦っつてんの。結局、太ちゃんも適わなくて、体中蜂に刺されて大泣きしちゃっつて」

その時の懐かしい風景がチサには観えているのか、チサの遠くを見つめるその目は、まるで小学生そのものだ。

柚木はというと、恥ずかしさで柄にもなく、顔を赤らめていた。

というか、チサは淡々と語ってはいるが、柚木にとっては生死の堺をさ迷いかけた出来事だった。

「充くん、あの頃から人一倍、冷静に周りが視えてたもんね。私が泣いて太ちゃん止めてるとき、充くんは、私のお父さんの現場まで大人達呼びに行つてて、お父さん達が駆け付けるのが遅かったら、太ちゃん、シヨツク死しててもおかしくなかつたつて」

あの時、気付いた時には、柚木は病院のベッドの上だった。

……そうか。だから、なんとなくしか覚えてないのか。

「太ちゃんはね、今、色んなことがあつて、周りが上手く視れてないと思うの。だから、充くんが生きてたら……」

その通りなのかもしれない。柚木は、自分の知らないうちにも、充に助けられてきている。自分が何も考えず喧嘩していても、充はそのフオローも徹底していた。

昔、暴走族の竜騎閃の頭とのタイマンをすると、川原に柚木が一人で向かったことがあつた。だがそれは、竜騎閃の罠であり、川原には木刀や角材を持った十数人の族が待ち構えていたのだ。柚木は構わず十数人を相手取り、応戦していたが、いくら柚木でも多勢に無勢、現実、武器を持った複数の族を一人で倒すには無理があつた。一方、竜騎閃の罠を見越して、仲間を集め、柚木の窮地を救つたのは、他でもない充だったのだ。

……ただ、俺一人がガキのまんまつてわけだ。

「ああ。お前の言う通りかもな」

「じゃあ」

「ああ。もう、寺田の事は干渉しない」

「よかつた」

チサの顔がみるみる緩んでいく。本当に表情が分かりやすい。

「あ、太ちゃん達の分も、お焼香、私が変わりに済ませといたから。充くん、きつと喜んでると思う」

途端、今まで押し留めておいた何か弾けた。

親友の死。それが柚木に突き刺さる。受け入れられなくなかつた。信

じたくなかった。考えないようにしていた。ふと、悲しみに襲われることはあった。だが、親友の死の現実を、寺田への憎悪に転化していた。彼の死に耐えきれぬ程、柚木自信、心の強さを持ち合わせていなかったのだ。ずっと、幼い頃から一緒だった。これからも、大人になっても、ずっと一緒にツルんでいくものだと思っていた。それが当たり前だと思っていた。三人が。それなのに……。

柚木はチサに抱き付き、溢れ出す涙を止められない。チサは、始めこそ驚いてみせたが、柚木の肩を、優しく両手で包み込んだ。

「充、死んぢまったよおう……」

「うん」

それだけ言うと、チサは柚木の頭を黙って撫で続けた。

「うっ……」

こんなに、泣いたのはいつぶりだろう。喧嘩最強とまで言われた自分が、齢十八にもなって、少女に縋り付き嗚咽する姿はおかしいのだろうか。今まで受け入れようとしなかった分、その反動は、自分の想像を遥かに超えた悲しみを突き付ける。

柚木は、頭をチサに撫でられ、ただ、ただ子供の様に泣くことしか出来なかった。

チサと別れて家路を辿る。

雲の無い夜空は、星が満天に輝き、三日月が涙に濡れた目を照らす。皮膚にも、悲しみに濡れ、上を見上げたその時、この街の空がこんなにも美しかったことに気付かされる。

それと同時に、この美しい夜空を、もう見ることもさえ出来ない充のことを思うと、また、途方のない悲しみに襲われる。

……チサにはああ言ったが、俺はやはり寺田を許す事が出来ない。俺から、チサから充を奪った奴が許せない。

「なあ、太成。お前、チサのことどう思う？」

「どつって？」

「好きとか、嫌いとか」
「充、お前まさか、チサのこと好きなんか？」
「ああ。もう、ずっと」
「へえ、お前がねえ」
「んだよ。ニヤけてんなよ。けど、チサはお前のこと好きだかな」
「は？ んなわけねえだろ」
「やっぱ、気付いてなかったか」
「だから、んなわけねえって。てか、いつ告るんだ？」
「告るつもりはない」
「はあ？ 分かんねえ。好きなら告ればいいだろ」
「俺はお前とチサ、三人といればそれでいい。それに、チサと同じくらいお前も好きだしな」
「なんだそれ。キモ」
「お前の頭の方がキモい。今時、リーゼントはねえだろ」
「テメツ！ 男はリーゼントだろが。なんなら、アイパーにすつか？」
「ははっ。やっぱお前、おもしろえなあ。退屈しねえ」

7・崩壊

七・崩壊

街がざわついている。学校は夏休みに入るも、寺田の牙はジワジワと街の中高生等を噛み尽くしていた。

初めこそ柚木等、不良と呼ばれる者等が、寺田という姿の見えないう者に対し躍起になっていたが、今となると、この街全体がその牙に怯えている。

ここまでで解ったことがあった。寺田は、何かの目的で誰も彼もを襲わせているのではないだろう。ただ、柚木等、街全体の怯える様をみて楽しんでるのだ。寺田にしてみれば、これはゲームみたいなものだ。目的も何もない。だからこそ、実態を掴むことすら出来ない。

……こんなゲームに、充は殺されたつてのか。

それと、もう一つ……、

「柚木さん、俺からの情報もこれが最後です。すいません。俺も、もう、この件からは手を引かせて下さい」

シゲが申し訳なさそうに柚木を伺う。

柚木は、彼に無理強いしていた訳ではなかった。彼は本当によくやってくれていた。

「ああ、お前はよくやってくれた。別に無理することも無い。後は俺一人でもカタつける」

「すいません。俺も、出来るだけ柚木さんの力になりたかったんです。充さんが死んで、どうしても敵打ちたかつたし。落ち込む暇なく、毎日、誰かがやられてて、でも、自分に危機感が感じられなかったんです。どこか、これは塀の外の出来事なんじゃないかって。」

だってそうでしょう？　まるで、敵の実態が掴めなくて、奴等には事をやる動機がないんです。

この街だけでも、ガキは何千人もいるんですよ。その中で、奴らはランダムにガキを襲う。奴等の目的が解らないから、自分が狙われる理由も解らない。いや、そもそもランダムだから狙われていないんです。奴等の不気味な恐怖はありました。でも、自分は大丈夫なんじゃないかって」

シゲは現実味が湧かない。どこか他人事の様だと言いたいのだろう。気持ちは解らないでもなかった。柚木自信も、自分が塀の外にいる様な感覚は感じていた。

だが、実際は充が殺され、数人の仲間がやられている。柚木には、それをどうしても他人事で済ませられなかった。

シゲは、この件からは手を引きたいと言ってきたが、その理由をまだ話していない。話を聞く限りでは、笹崎等とは違うようだ。

寺田に関して何か掴んだと、柚木を呼び出したのはシゲだった。それが手を引くことに、何かしら起因しているのだろうか。

「塀の外にいる様な感覚は俺も感じていた。言いたい事は分かる。で、お前は何か掴んだんだろ？」

柚木は奴等の実態への確信を急いだ。奴等の実態のない不気味さが不快で堪らないのだ。確信を得ることで、それが解消されるならと、シゲを急かしてみせた。

「はい。塀の外にいる様な感覚、それは間違いでした。塀の外にいたんじゃない。塀が、広すぎたんです。だから、気が付かなかった。奴等が、こんなにも近くにいたなんて……。俺、もう、誰を信用していいか……」

シゲはガタガタと体を震わせている。

「何言ってる。落ち着け。何か分かったのか？　近くにいたって、

寺田が？」

「すいません。落ち着きました。寺田は相変わらず足取り掴めません」

そこで、シゲは言葉を詰まらせた。

「仲介人が、分かったのか？」

「……はい」

「で、どのどいつだそいつは。清門の奴か？」

様子がおかしかい。大体、何故シゲはこんなにも言葉を詰まらせているのかと、柚木は不安に駆られた。それに、誰を信用していいかなど、奴等が近くにいたなど、それではまるで、自分等の身近な者が仲介人だったと言っているようではないか。

ドクンッ。

内臓が軋む。太ついペンチで内蔵が引き千切られる感覚が襲う。

脈打つ心臓の鼓動が、呼吸を困難にさせる程早くなる。

ドツドツドツドツ。

一秒一秒が長く感じられる。シゲの言葉の間を待つだけで、疲労感さえ覚えるのだ。嫌な予感がする。聞いてはいけない。駄目だ。

その先を……。

「……甲斐さんなんです」

「あ？」

聞こえなかったわけではない。はっきりと聞こえていた。ただ、それを頭が理解出来なかった。いや、理解したくなかったという方が正しい。そんな、曖昧な考えで甘えている柚木の頭に、シゲは追い打ちを掛け、もう一度柚木に現実を突き付けた。

「甲斐さんだったんです。仲介人は……」

柚木にそれを受け入れきれぬわけがなかった。充を死に追いやり、世間を騒がせている黒幕の一人が、仲間の甲斐だったなんて。動機が分からない。柚木等と甲斐は、中学からの付き合いで、一緒にバカやったりしてきた仲間なのだ。特に充とは、よく二人でツルんでいることが多く仲が良かった。

……大体、充がやられた時だって……、

瞬間、笹崎との会話の時の違和感が頭をよぎる。

『相手は数人だったらしい。商店街を甲斐と二人で歩いている時に後ろから。鉄パイプで頭割られてた。徹底的だったよ。その後も』
『どうやら、連中は甲斐には目もくれず充に集中攻撃してたらしく、甲斐も止めに入ったんだろうが、あいつ、喧嘩弱えし』
『たまたま、その場に居合わせたのが充で、奴らの中に充を知っている奴がいた』

あの時の違和感を放っておくべきではなかったのだ。人通りが多い商店街を鉄パイプ持った輩が歩いていけば、それは尋常じゃない後ろからだから気付かないなんてあるだろうか。充等が気付かないにしても、周りの買い物客達はそれを見ているはずなのだ。それならば、彼が、その後ろの騒々しさに気付かないということが有り得るのだろうか。

甲斐が一人を相手にしていたというのも、何か釈然としない。充は確かに喧嘩が強かった。だが、後ろからの一撃で、彼の意識は既に失われていたのだ。それならば、他の数人は甲斐を相手取るのを一人に任せず、意識の無い充よりも、残った甲斐を相手する方が自然なのではないだろうか。

……と、いうことは……、

そこまで考えて、言い様のない怒りが込み上げてくる。

甲斐は充を呼び出し、信頼しきっている充を後ろから奴等に襲わせた。いや、始めから一緒にいたのかもしれない。そんなことはどちらでもいい。甲斐からしてみれば、奴等と共犯なら、いつでも充を後ろから襲わせることは出来たのだ。

彼が充を裏切つてまで、寺田の仲介人をする理由が柚木には解らない。ただ、充は信頼する仲間の裏切りで死んだということ。それは紛れもない事実なのだ。余りにも惨すぎる。イカれている。皮肉にも程があつた。誰よりも仲間を大切にしている彼が、その仲間の裏切りで命を落としたのだ。やりきれない。

……この街は、一体どうなってるやがる。

寺田にしても甲斐にしても、この街で多事多難に事が起き過ぎる。寺田の件とは別に、柚木も最近知ったのだが、街は一家心中事件まで世間を賑わせていた。その子供は生きていたらしいのだが、それが柚木と同じ年の、大滝高の同級生らしかった。名前は覚えていない。ここ数日で、何故、自分の周りでどうも事が起きてしまうのだ。

柚木は、憤りを感じ家路を辿った。

どんな状況だろうと、家に近づき、細い路地に入ると、この吐き気はやってくる。葬式の帰りもそう。柚木を感傷に浸らせたのは、あの公園だけだった。家には、柚木の都合などお構いなしに、残酷な現実が待ち受けている。そして今日も、二人組の男はベンツを路肩に停め、そこにいるのが当たり前のように、アパートの入口に立っていた。

……毎日毎日、仕事熱心なことだ。

その仕事に対する熱を、もっと真面目な事に使えばいいだろうに、彼等が借金の取立てをしているのは、ここだけではないだろう。彼等のその金に対する執着ぶりが、柚木には理解出来なかった。

相変わらず、佐伯の鼻に付く猫なで声が耳に入る。

「大成ちゃん。お父さん、お金払ってくれないから、大成ちゃんが払ってくれるって言ったよねえ？ おじさん達、大分待ってたんだけど、今日は用意出来たのかな？」

柚木に、三 万という大金を、すぐに用意出来るはずもない。

それに、父は金を返していない訳ではなかった。昼夜、汗を流し働いた金を切り詰めては、佐伯等の経営する、「ケイアイ・ファイナンス」へ、毎月銀行から振り込んでいた。それにも関わらず、高すぎる暴利が逆に借金を増やしているのだ。

「すみません。もう少し、待って下さい」

柚木は、拳を握り、苦虫を噛み潰したような顔をさせ、意思のな

い謝罪をした。

「おじさん達も暇じゃないんだよ。太成ちゃん、本当にお金返す気ある？ おじさん達もさあ、色々考えちゃう訳。このままじゃあ、埒が明かないんじゃないかって。で、調べさせてもらったんだけど、いつもと違う。何か嫌な予感がする。不安がよぎる。並々ならぬ虫の知らせがした。ずっとこのままで通せることではないとは分かっていた。分かっていたが……、

「太成ちゃん、こういうことは早く教えてくれないと……」

一体、佐伯は何を調べ上げたというのだろうか、言葉に一時の間をおいた。そして、

「……前原建設って知ってるでしょ？」

と、口端を吊り上げ、卑しく俗悪な顔をさせ、柚木を覗き込んだ。「なっ？」

身体に電気が走った。

……フザケンナ！

チサの家は関係ない。どうかしている。何故、自分の借金が彼女を巻き込むのだ。

「その社長と太成ちゃんのお父さん、子供の頃から大の仲良しらしいんだわ。そして、その娘がこれまた、太成ちゃんと同級生。前原建設の社長は情に熱いらしくてね」

最悪だ。一番巻き込みたくない相手を。確かにチサの父親は情に熱い。柚木の父の借金のことも肩代わりしようなどと言ったこともあった。だが、父はそれを断った。それは柚木も断るべきだと思っただ。もし、父がチサの父親から借金を肩代わりされようものなら、彼は父を一生軽蔑しただろう。チサも、肩代わりすることは、何とも思っていないのだらう。彼女は、柚木がそれにより苦労している様を見てられないといった感じだった。だが、彼等ヤクザは、金の亡者なのだ。肩代わりして、金を返済してそれで終わる保証はない。有りと有らゆる限りを尽くし、前原建設から金を絞りとることを考えてくるに違いない。絶対に、是が非でも、チサを巻き込むこ

とは出来ない。

「まあ、今日はそれを伝えに来ただけだから、安心して。おじさん達、優しいだろ。お父さん、今日も居ないみたいだし、前原建設にでも顔出そうかね」

「はい」

と返事をする、細身の男が背を向け、路肩に止めたベンツへ歩き出す。それに続き、佐伯も柚木から飄々と身を翻した。

途端…、

柚木の中のナニカが音を立てて崩壊した。柚木は車に向かい歩いている佐伯の後頭部を殴りつけた。

「何さらしとんじゃコラア！」

ベンツのドアを開け、佐伯を迎えようと待っていた細身の男は、物凄い形相と罵声を浴びせ、柚木に向かって来た。

怒りが増幅する。憎しみが爆ぜる。制御出来ない。頭に血が登り、視界が赤く染まる。蟲が這う。胸に、頭に。その群れが、身体中に蠢く。支配されたのだ。怒気に。憎悪に。理性は失い壊れた。

………そこからは、あまり覚えていない。気が付けば、立ち尽くしている柚木の足元に、二人の男が倒れていた……。

8・出会い

八・出会い

夕暮れの街は、相も変わらずざわついていた。路肩でバラバラの制服を来た輩が、一人の男に対し非道な暴行を加えている。皆、そこを通る誰もが、見て見ぬふりを決め込んでいた。

……もう、どうでもいい……。

数時間前の柚木なら血相を変えていたのだろうか、言ってしまうば、今の柚木は、抜け殻以外何者でもなかった。だが、いくら何も考えられない状況でも、経過する時間は、ドロドロとした思考を頭に流れこませる。ぶつけようのない怒り、憎悪が柚木の頭を支配していく。

『太ちゃんはね、今、いろんなことがあって、周りが上手く視れてないと思うの』

……こんな時まで、お前は俺ん中に入ってくんのか。まったくだ。いろんなことが在りすぎた。もう、何も視えなくなっちゃった。

自分の周りで忌々しい事ばかりが起こる。寺田にしても、借金にしても、それに共通していることは……、金、金、金。金がどこまでも絡み付く。金が憎い。金に翻弄される人の心が憎い。甲斐も、金のせいなのだろうか……。

イラつく。死。

ムカつく。憎い。腐っている。

吐き気がする。金。裏切り。金。金。憎い。

憎い。憎い。憎い憎いニクイ憎いニクイニクイニクイニクニクニクニクニク……。

ドン！ 憎悪に取り付かれた柚木の肩に人がぶつかった。

「おい！」

ぶつかった男は足元しか見ておらず、脇目も振らず過ぎ去ろうとする。男は、猫背のガリガリで、見るからに陰気な空気を背中越しに漂わせていた。夏休みだというのに制服を着ている。大滝高の制服。

「おい！ シカトしてんじゃねえよ！」

「へ？」

ゴッ！ 柚木は男の振り向き様に側頭部を殴り付けた。いつもなら見向きもしない柚木も、ドロドロと敵ねる憎悪が抑えられず、その怒りを拳に乗せ、肩をぶつけた男に振りかざしたのだ。もう、感情も、行動も、自分で制御すら出来なかった。

男は尻餅を付き、側頭部を抑え俯いたまま動かない。

「面あ、上げるよ。テメエは今、俺にぶつかってんだよ。何か言う事があるだろ」

男は言われると、柚木の顔を見上げた。

驚いた。なんて顔をしているのだ。自分も先程まで絶望の淵のような顔をしていたのだろう。だが、この男の顔は、それとはまた違う次元の絶望を顔に淀ませている。

……目が、死んでやがる。

その視線は、柚木のことを見上げ、彼をその視線に捉えてはいるのは確かだ。だが、全く自分を見ていないのだ。身体だけこの世に置いてきたのではないかと思わせるほど、その男の目には、生気が全く感じとれなかった。虫酸が走る。

「すみません」

男は力なく頭を垂れた。

「俺はなあ、テメエみてえな、世の中の不幸、全部背負ってます。テメエだけが世界で一番不幸みたいな面してる奴が、一番ムカつくんだよ」

柚木は男の胸ぐらを掴み上げ、やり場のなかった怒りを男に吐き

つける。

「すいまつ」

バキッ！

男が謝りきる前に柚木の拳が振り抜かれる。

「そうやって謝ったら、皆許してくれんのか？　ずっと、そうやって生きてきたんだろ。テメエ」

柚木はそう言つと、男を薙ぎ倒し、馬乗りになつて続け様に罵声を浴びせかける。

「何か言えよ！　テメエ自信じゃ何もせず、いつも人のせいにして逃げてんだろ？　なんで俺ばかりこんな目に遭うんだつてな！」

初めて会う男。柚木がその男のことを知る由はない。ただ、この男の目がそう言つていようで気に喰わなかつた。

これだけ痛めつけても、顔一つ歪ませないのだ。相変わらず、その視線の先の柚木を見てはいない。明らかに、目が合っているはずだというのに。人間、何が遭つたらこんな顔になれるのだろうか。

柚木は、この男に対し不気味な恐怖を感じ始めていた。

「何か喋れつつつてんだろが！」

バキ！　ゴス！　バキ！　バキ！

柚木の拳が何発も男の顔面に降り下ろされる。止まらない。柚木自信も自分の拳を止められずにいた。怒りが治まらない。殴つても殴つても、寺田や甲斐、ヤクザ、金、形のない憎悪が溢れだす。

振り下ろす拳が痛い。拳に付いた血は、男のものかも、柚木自身のものなのかも判らない。ただ、鈍い音と共に、鮮血が柚木の顔にまで跳んでくる。

バキ！　バキ！　ゴッ！　バキ！

「チ…ウ…」

男が何かを呟いた。

ガッ！

瞬間、何が起きたか判らなかつた。柚木の蟀谷こめがみからはボタバタと血が滴り落ちていた。ガッ！

また、蟀谷に激痛が走る。

ガッ！ ガッ！

男は、同じ場所を何度もナニカで撃ち付ける。目眩がする。その激痛が現状を把握させない。

男の手には、シャープペンらしき物がある。らしき物。男の手にあるそれは、柚木の蟀谷への数撃のうちに折れたのか、原型を留めていなかった。

柚木は、蟀谷への四度に渡る衝撃で男から仰け反っていた。

「テメエ、調子に……」

ガッ！

柚木が喋りきる前に、また蟀谷に一撃が入る。

狙っているのか、男は蟀谷ばかりに折れたシャープペンを打ち下ろすのだ。蟀谷からは、傷口が開きドクドクと血が流れ出す。

いつの間にか、今度は男がマウントをとっていた。

柚木は無意識に傷口と両目を両腕で庇った。

ガッ！ ガッ！ ガッ！

男は構わず、空いたスペースに折れたシャープペンを撃ち降ろす。鮮血が飛び散る。撃ち付けられた場所に新たな痛みが増していく。

と、男の攻撃に一瞬の間が空いた。

その間の正体は、次の一撃で嫌が応にも思い知らされるのだ。

ゴッ！

「ウアッ！」

鈍い音が頭の中から聞こえた。もう、激痛とか、そういった次元を超えている。その一撃で、柚木は今、初めて自分が死に直面にしていることに気付かされたのだ。

……殺される。

柚木に恐怖が走る。目を庇っている右腕をずらし、掌を目元まで持って来る。そして、少しの指の隙間から男を覗き込んだ。

男の右手には、握り拳程の石が握られていた。あの時、一瞬の間の正体はこの石に他ならなかった。

ゾクッ。

背筋が凍りつく。身体は知らずに震え出す。一瞬の内に、足元から首元までの全身の毛が逆立つ感覚が柚木を襲った。男が石を持っていたからではない。この男の目が、こんな状況にも関わらず、相変わらず……、死んでいるのだ……。

そう、全くの無表情で、握り拳程の石を振り上げている。その無表情の顔は、数発もの柚木の拳により、歪に腫れ上がり、そして、柚木自身の返り血を纏い、顎先から血を垂らし、死んだ目で自分を見つめていた。今までこの男は、自分を見てなどいなかった。だが、改めて死んだ目で見つめられると、それが、これ程の恐怖を生み出すとは想像だに出来なかった。明らかに、この男は柚木を殺しにかかっている。人が人を殺そうとする時、こんなにも無表情でいられるものなのか。

……何なんだ、コイツは……。

柚木が人に対して、これ程の恐怖を感じたことがあっただろうか。もう、柚木はその男を人としてすら認知していなかった。

……化け物だ。人なんかじゃない。

男の放つ一撃一撃には、全く感情が感じられなかった。人が人へ手をあげる時、人は必ずその感情を拳に乗せてくる。憎しみや、悲しみ、怒り、愛情さえ感じる事もある。それは、相手が武器を持っていたとしても例外ではない。だが、この男にはそれが全く感じられないのだ。目の前にいるこの化け物は、一体何者なのだろう。自分が撒いた種だった。因果応報。憎悪の対象に、苛立ちをこの男にぶつけた。だが、今は、逆に自分が死に直面させられている。この男が寺田だというのだろうか。この男が誰であれ、自分のこの窮状は変わらないのだ。怖い。コワイ……。

まるで、自分のものじゃないかの様に、意思に反して足が震える。ゴッ！

返り血を浴びた石が、恐怖に怯える柚木の頭に振り降ろされる。ゴッ！

今となれば、男は庇っている腕の隙間を狙うことなく、腕に、手に石を振り降ろす。ゴッ！

柚木の手の指々は、在らぬ方向に折れ曲がり、腕には赤黒い斑点が散りばめられている。ゴッ！ グシャ！

自分に対して死が目の前に迫る。ゴッ！

想像していたよりずっと怖い。ゴッ！

……痛い。怖い。怖い。助けてくれ。タスケテ……。

ゴッ！ ゴッ！

意識が朦朧としている。恐怖が痛みと共に柚木を支配する。

……殺される。コロサレル。怖い。死。コワイ、コワイ……。タスケテ……。

……すまねえ……。チサ……。

『太ちゃんは、いなくならないよね？』

9・相原誠

守るべきものがあるから、人は強くなる

何もかも失くしてしまったボクは、どうしたらいいのだろう

いっそ、心も体も失くなってしまえばいいのに……

九・相原誠

五月蠅い。ガヤガヤ。ザワザワ。

「ええ、お前らもうすぐ卒業だ。もう、進路も決まっているものもいる。決まってるものも気を引き締め……」

「ねえ、進路決まった？」

「俺、まだあ」

「てか、昨日の特番

観た？」

「私、

大内定」

「見てねえよ」

「うわっマジかよお」

「……であるから、もっと受験生としての自覚を……」

五月蠅い。ガヤガヤ。ザワザワ。

……変わらない日常。のどかな学校。そんな平凡な毎日でいい。特別なんて要らない。良い意味でも、悪い意味でも、特別なんて。

平凡、それでいいのに。

学校では、教室の授業空間が一番落ち着ける。誰も干渉しないし、誰も自分を傷付けない。彼等に自由を与えると、授業の束縛から開放された彼等は、立ち所に自分をストレスの捌け口の的にした。ただ、それも彼は慣れてしまつて、さほど苦痛ではなかった。

高校三年の夏の教室は、まるで緊張感がなく、ガヤガヤとつまらない毎日を繰り返す。授業中にも関わらず、教師の話の聞いている者はいるのであるか。

窓際の後ろから四列目の席に、相原誠（あいはらまこと）は、見当違いの教科書のページを開き、窓の外を眺めている。この空間が一番落ち着くと思いつつも、彼はその空間にある全て、授業すらも拒絶していた。

校舎にチャイムが鳴り響く。まるで統一性の無かった生徒等は、この瞬間だけは、皆、同じ動作を繰り返す。

「では、ここまで」

「起立、礼、着席」

昼休み。皆がそれぞれに行動を取り始めた。

一瞬、統一された静けさが訪れるも、教室は、より一層の喧騒が立ち込める。机を付け合い、弁当を待つてまいしたとばかりに開封する者。学食に行く者。昼休み前、すでに半分以上弁当の中身が無くなっている者。

今日、誠には弁当がない。ポケットに手を入れる。チャリン。

「三百円か。パンは買えるな」

誠は、相変わらずガヤガヤと五月蠅い教室を出ようとする。

依然、鬱陶しさを増す教室は、居心地を悪くする。かといひ、学食が騒々しくない訳でもなかった。逆に我先にと昼飯に在り付く人の様は鬼気迫るものさえ、誠に感じさせた。

彼は、それが苦手なため、人が少なくなつた後の残り物をいつも買っていた。といつても、元々、持ち金三　円じゃ買えるものなど高が知れている。

購買に向かうため、教室を出た先で突如、背中に息が止まるほどの衝撃が走る。突発的な後ろからの衝撃に、誠は廊下に倒れ込んだ。「おい。いきなり背中に蹴りかよ。酷いことすんなあ、吉井」

声とは裏腹に、茶髪の前髪を弄りながらそう言う男の顔は、卑しい笑みを浮かべていた。だらしなくシャツをズボンから出し、そのズボンは腰下まで下げられている。そして、同じような出で立ちをした金髪の吉井と呼ばれる男は、

「いやいや、いい加減もう恒例になってんだからよ。この時間になったら、俺等のこと素通りはないっしょ。なあ、誠」

と、喜々に、誠に同意を求めてきた。

……今日も、昼飯抜きか。

吉井が言うように、この時間、吉井達が誠に絡み、金をせびってくるのは恒例になっていた。

「ぎゃははっ。そりゃそうだ。ほら、吉井もこう言ってるんだし、早く金出せよ」

慣れている。こんなことは日常のほんの一部の出来事に過ぎない。大概の事は受け入れられる。これは自分じゃないと、今起きている事を他人事のように思うと幾分楽になれた。

ただ、その周りの傍観者のクスクス嘲る声や、冷たい視線、痛いものを見る目、同情、哀れみの視線は、どうしようもなく耐えられない。

「これ、俺の持ち金、全部」

ポケットに入っていた、誠の昼食代の三円は吉井達の手に渡った。

「お前、相変わらずシケてんなあ。これじゃあ、俺と佐藤で分けたら一五円じゃねえか」

「ホントだよ。もう一桁、0を増やすぐらいの努力して来いよ」

佐藤が無茶なことを言う。たった、三円かもしれないが、それが毎日だ。バカにならない。

「まあ、いいじゃねえか、佐藤。と、言っても、やっぱこれだけじ

や俺達の懐をの満たすにあ足りねえなあ。て、ことでよ、一発一
円でもいいから、俺達に十発ずつ殴らせる」

「え？」

「いいねえ、その脅えた顔。んじゃ、俺から」

そう言いうと、吉井の拳が誠の顔面へと放たれたのだった。

……痛え。

トイレで血に汚れた顔を洗い流した後、昼食を食いそこねた誠は
行く宛なく、校舎裏の駐輪場で校舎を背に座り込んだ。結局、彼等
は十発どころか、一発ずつ殴るのに飽きて、殴るや蹴るの暴行を繰
り返したのだ。

それを見て煽る連中や、歪な笑い顔で写メを撮る女生徒。殴るや、
蹴る。その痛みにはいくらでも耐えられるが、どうもそれを取り巻
く、周囲の傍観者の視線からの惨めさは耐えられない。

他人事の様子に事を受け流そうとしても、それらが現状の証人にな
り、それを許さないのだ。今、イジメに遭っているのは、自分自身
なのだ。と、つくづく思い知らされる。

でも、それでも、こんな学校の日々を耐えられるのは、家での現
状に比べれば、些細な事にも思えるからかもしれない。

そう、こんな学校でも、家にいるよりマシだった。

……腹減ったなあ。

駐輪場の屋根と、それを支える柱の繋ぎ目に、大きい蜘蛛の巣が
時折小刻みに揺れている。そこには、必死に絡み付いた蜘蛛の巣か
ら逃れようと足掻く、アゲハ蝶が羽をばたつかせいた。だが、獲物
を捉える事に特化したそれからは逃れようもなく、蝶が藻掻けば藻
掻くほど、蜘蛛の糸は蝶の体に絡み付く。獲物が力尽きるのを待つ
てか、蝶の三分の一の大きさにも満たない蜘蛛が、巣の端で不気味
に動かない。

必死に藻掻く蝶が自分に似ている様でやるせなくなる。結局、自
分もこの蝶と同じなのだろう。いつの間にか、人間社会の捕食者の

巢に絡みついて逃れる事なんて出来やしない。

ただ、蝶は必死に藻掻いている。無駄なのに。必死に足掻いて。必死に。現状を変えようと……。

……全然違うや……、俺と……。

必死で現状から抜け出そうと藻掻く蝶に対し、誠は現状から逃れることを諦めてしまっていた。ただ、日々を耐え抜いているだけなのだ。同じなんかではない。巢から逃れようと足掻いている蝶の方が、よっぽど今を生きている。

誠は、蜘蛛の巣に雁字搦めの蝶を助け出そうと手を伸ばした。

予期せぬ第三者の大きな手に驚いてか、蝶は一際羽を動かし、巢を揺らしている。端で獲物が力尽きるのを待っていた蜘蛛は、俊敏に柱の隅へと身を隠した。

蝶に絡み付いた蜘蛛の糸を引き千切り、羽に絡み付いた糸を丁寧に取り上げる。蜘蛛の巣は半分以上が壊れてしまった。指には蝶の鱗粉が付着し、手には蜘蛛の糸が絡み付き、風が垂れ下がった糸を揺らしている。

誠は、蝶を少し高い花の上に放してみせた。蝶は羽ばたくも、力なくヨロヨロと地面に落ちていくのだった。

蝶の羽はもう、ボロボロで飛べなくなっていた。こうなったら蝶はもう生きていけない。ただ、力尽きるのを待つしかないのだ。

……俺、余計な事したのかな……。結局、自分の事さえ救えない俺が、生き物を救うなんて無理なのかな。

泣きそうになる。自分のやる事、全てが無意味に思えて。

グルルル……。

場所、状況を問わず、腹の虫は誠に食べ物求めてきた。

……こんな時に……。

食事に在り付けなかった蜘蛛には悪い事をした。

10・友達

十・友達

身体の節々が痛い。歩く度に関節が悲鳴を上げる。真夏の熱い日差しが、顔の傷口をジリジリと焼き、額から流れる汗は、ヒリヒリと傷を痛ませる。

夕暮れの街は朝に比べると、まるで同じ場所とは思えないくらいに風景を変えてみせる。

誠は、この夕暮れ時の街が割と好きだった。黄昏に落ちる陽の見せる茜色の空。それを受け止めるアスファルト。時折、吹き抜ける夏風の匂い。一方、帰宅ラッシュの車の並び、家路を急ぎ行き交う人の群れ。それを取り巻く人の流れが、どうも誠には好きになれなかった。

足を引きずり歩く誠の視界に、路地で一人の男が、三人の不良等に醜悪な暴行を受けている様が入ってきた。三人共、制服に統一性がなかった。

聞いたことがある。寺田とかいう者が絡んでいる、何か物騒な話。実態も目的も解らない不気味な騒動。自分の高校の生徒も何人もやられているとか。

……悪いけど、こんなのにには関わりたくないな。

「助けて……」

……ヤバッ、目が合ってしまった。

ランチにされている男が誠に救いを求めてくる。誠は周りに目を配るが、誰もが皆知らない振りをしていた。大人までも皆、早歩きでその場から立ち去ろうとするのだ。

……どうする。

足が震えだす。吉井達にやられた身体はまだ、痛みに悲鳴を上げ

ていた。それ以前に、元々自分さえ救えない誠が、この場を何とか出来るわけがないのだ。

「何見てんだテメエ」

不良の一人が、こちらに気付き手を止めた。標的が変わる。

「助けて！」

男は必死に誠に助けを求めてくる。

「ち、ちくしょうっ！」

誠は意を決し、一心不乱に不良に向かっていった。だが、彼はあつけないなされ、ガラガラと音を立て、ゴミ溜めに背中から倒れ込んだ。

……だから、俺には無理なんだ。大体、弱い俺なんかには助けなんか求められてもこうなるのがオチだ。

「何だお前、威勢だけは良かったけど、バカか？ 弱すぎんだろ」

不良の一人が拍子抜けた様に嘲る。

「まあ、お前でいいや。こちらら誰でもいいんだ。金さえ貰えれば」
見ると、さつきまでリンチに遭っていた男の姿が見えない。

「あのガキなら、お前がやられてる隙に自分だけ逃げやがったぜ」

「え？」

「いいなあ、その目。土壇場で裏切られた奴のそういう目。俺、大好物」

「趣味悪いなあ、お前」

不良達は、ゲラゲラと下品な笑い声を響かせた。

良かった。男が逃げたのは予想外だった。だが、強がりとかではなく、男を現状から救い出したことには違いはない。

人を救うとか助けるとか、正直なところ誠には柄じゃない。ただ、あの時の地面に力なく落ちていく蝶が、彼の頭にチラついて離れなかった。

誠は、立て掛けてあるデッキブラシを手に取る。ブラシを持った手がガタガタと震える。それでも、自分を奮い立たせるしかない。デッキブラシを両手に持ち、恐怖に脅えた心を鞭打ち不良らを睨み

誠がそう言うと、前原は少し驚いているようだ。彼が自分のことを知っているのが意外だったのか、彼女の大きな目が一際大きく開かれた。

「私のこと、知ってるんだ」

前原千沙とは、同級生ということ以外、まるで接点がない。だからか、彼女は誠が名前を知っている事に対し少し驚いていた。といっても、同級生なのだ。名前を知っていてもおかしくはない。

というか、前原千沙は、学校ではちょっとした有名人でもあるのだ。大滝の喧嘩を知るなら柚木、大滝高を知るなら充を知れ。と謳われる柚木太成と藤井充。この二人と仲良く、そして、その二人を一喝で止められる女なんてそうはいない。それが、今、誠の目の前にいる、この前原千沙だった。

「いちお、同級生だからね」

「そっかあ。君は確か……」

「誠。相原誠」

「相原誠くんね。私は前原千沙」

……いや、だから、それは知ってるって。天然、入ってんのかな、この娘。

今しがた、誠は前原の名前を呼んでみせたというのに、彼女は改めて自分の名前を紹介するのだ。その声は優しく、その表情は純粹で、今まで彼が見たどの人間よりも澄んでいた。

大袈裟なのだろう。彼女はどこにでもいる普通の少女だ。ただ、誠の周りに絡み付く人間は、尽くその人間の醜悪とも呼べる汚い部分を彼に見せつけた。まるで、彼が人間でないように。だが、前原千沙という少女は、純粹に相原誠という人間を見つめ、言葉を交わすのだ。ただ、それだけのことに、誠は言葉を飲み込んだ。

「おい。さつきから俺の事忘れてねえか？」

言われて思い出す。自分は確かこの男の膝の上に。

男を見て驚いた。この男こそ、大滝の二強のうちの一人、藤井充に他ならなかった。誠にとってこの二人は憧れでもあった。喧嘩の

強さもそうだが、生き方に芯がある。自分とは正反対で、自分とは違う世界の間人だと、憧れの中にも劣等感さえ抱かせていた。

彼は、同級生とは思えないほどのガツチリとした筋肉質の体型に、黒く短い髪を清々しく風に靡かせている。

「ふ、藤井君」

「あ？ 俺の名前も知ってるのか」

「当たり前でしょ。ウチの学校で充くんの事知らない人はいないでしょ」

……いや、前原さんも一緒だつて。

二人ともどこか抜けている。誠が想像に抱く藤井は、もっとクールなイメージがあったが、どこか人間味を感じられた。

本当は皆そうなのかもしれない。人との会話を好まない誠は、イメージでしかその対象を把握していなかった。自覚している。自分は心が弱い。身体に受ける痛みより、人の言葉から発せられる暴力で、心が傷付けられるのが怖かった。

だが、初めて話す藤井充は、柄にもなく誠に膝を貸していた。思いついて少し可笑しくなる。大滝の二強と謳われ、冷静かつ、頭のキれる藤井充が男を膝枕していたのだから。

「そんなもんか？ 俺ってそんな有名なん？」

本当に気付いてないのか、藤井は誠に問いかけた。意外に本人達には分からないものなのだろうか。

「そりゃ、まあ」

「そっか」

「あ、藤井君、膝、ありがとう」

「全くだ。なんで、俺がテメエなんかを膝枕しなきゃならん」

藤井は、そうとう嫌だったのだろうか手をワナワナさせている。

そんなに嫌なら、ベンチでそのまま寝かしとけばよかっただろうに。

「もう、だから、私の膝に誠くん寝かしてって言ったじゃない」

「バカ。んなことさせられるかつ」

どうやら、誠を前原に膝枕させる変わりに、彼は、自分がその代償を買って出たらしかった。

……なるほど。そういうことか。なんて分かり易い。前原さんは気付いてんのかな。

「それにしても、凄いな。誠くん」

前原が話を切り替え、誠に凄いなと言つが、誠にはそれが何に對してなのか理解出来なかった。

「え？ 凄いつて、何が？」

「だって、勇気あるよ。男の人、助けるために不良達に向かってくるんだもん」

……ああ、そっか。見てたんだ。情けない。

結果、その後誠は返り討ちに遭っていたのだが。

「助けるとか、そんなんじゃないよ。結果、この有り様だし。情けない」

「ううん。そんなことない。私、なんとかしなきゃって、周りの人達に助け求めても皆、知らん振りするし、そんな時に誠くんが、元々、身体ボロボロで足引きずってたのに。ああ、この人、強いんだなあって」

「強い？ 強くなんてないよ。別にあの時、怪我なんかしてなくても結果は一緒だって。俺、喧嘩弱いし」

「ううん。強いよ、誠くん。喧嘩とか力とか、そういうんじゃない。何て言ったらいいのかな。心が強い人なんだなって」

心が強い。誠がそんなことを言われるのは初めてだった。

彼女は思い違いをしているのではないだろうか。自分自身、心が弱いのは誰よりも自覚しているつもりだ。自分には、人に褒められるような強さなど持ち合わせてなどいない。

ただ、例えそれが思い違いだとしても、自分を褒めてくれる彼女の言葉は、自分を嬉しくも高揚させているのが判る。

……でも、やっぱりそんなじゃない。

あの時、現状に狼狽え戸惑っていた誠は、不良達に目を付けられ

ただけだった。それに、その前から誠に掠める一縷の何かが、頭の中にずつとチラついていたのだ。本当は逃げたかった。怖くて、震えていた。身体は痛みを訴え、心は逃げると自分に言い聞かせた。

……ただ、頭の中に、蝶が……。

「よく、分からない」

「いいの。分からなくても。でさ、男の人、誠くんが相手してる間に自分だけ逃げちゃったでしょ」

「え？ あ、ああ」

……そういえばそうだ。つくづく情けない。

「誠くんが本当に強いって思ったのはその後。だって、男の人、もう逃げちゃったんだから、誠くんも逃げちゃえばよかったじゃないでも、誠くん手震えてるのに、デッキブラシ持って不良達を凄い二ラんでるの」

……情けない。

誠は、ガタガタと震え、デッキブラシを持つ自分の姿を客観的に見て、恥ずかしくなる。

「私、それ見て、止めなきゃって思ったんだけど、何も出来なくて取り敢えず、手当り次第に電話して」

「んで、たまたま近くにいた俺が飛んで来たってわけ。チサが物凄い喧騒で助けてってよ。チサに何かあったらって、ぶっ飛んできたんだが、そこには三人がかりでフクロにされてるお前がいたってわけ」

藤井が前原の話に割って入ると、事の顛末を話してみせた。

「充くん、暇人だからね。助かった」

「それが、急いで駆け付けて来た相手に言うセリフか？」

前原の発言に藤井は怪訝そうに噛み付いた。

「冗談だつてば」

この二人のやり取りを見てみると、誠は、自分がどれだけ二人のイメージを造り上げていたかを思い知らされる。人との会話が苦手な誠だったが、今のほんの少しのコミュニケーションで顔を出す、

藤井充、前原千沙の面々がとても新鮮で、人と話すその温もりに彼は嬉しく、少しの感動さえ覚えていた。

「まあ、話戻すけど、チサから電話あった時、俺、甲斐といたんだけどよ。甲斐、急に用事思い出したとか言いやがってよ。

んで、俺一人で現場駆け付けて、お前をフクロにしている三人組をシメあげた」

いちいち、電話があったとこまで話を戻すあたり、藤井は、前原に暇人と言われた事を根に持っているのだろうか。

「で、また三人組つてのが、制服がバラバラだ。二人共、この件の事は少しくらい知ってんだろ？」

藤井が二人に問掛けた。当然、誠も知っている。この件は今や、誠に近い年代の者は皆知っている。知っているが、寺田、清門高、金、この三つ以外何も解らないという、謎の多い騒動。

「なんとなくは」

「私もなんとなく」

誠に続き、前原もそれに答えた。

「皆、なんとなくしか知らない。いや、解らないんだ。で、その、三人組に色々聞き出そうとしたんだが、知らぬ存ぜぬの一点張り。伸びてる誠を放って置くわけにもいかないんで、取り敢えず、チサと公園までお前を運び込んだ。で、今に至るってわけだ」

……なんだか、情けないやら、申し訳ないやら。

「ありがとう。藤井君、前原さん」

「おう。まあ、喧嘩は慣れてるしな。気にすんな」

そう答える藤井の返事に続き、前原が誠にお礼の返事をする。

「どういたしました。ってか、チサでいいよ。私も誠くんと呼んでるし、皆、私のこと下の名前で呼んでるし。私、上の名前で呼ばれるの、あんまり慣れてないの」

チサでいいって言われるが、人とそんなに話をしたことがない誠は、彼女を下の名前で呼ぶという、たったそれだけのことが容易に出来きなかった。だが、よくよく考えると、それだけのことが出来

ない自分が、どれだけイタイ人間かのに気付かされる。それに、彼女は誠に対し、嘘偽りのない、純粹で無邪気な言葉を彼に投げ掛けるのだ。

「じゃ、チサさんで」

そう呼ぶと、誠は身体が萎縮するようなむず痒さを感じた。

「てか、お前、携帯持ってんだろ？俺とチサに番号教えるよ」

「え？携帯？」

藤井の一言が誠にとっては、余りにも以外で聞き返してしまう。ずっと孤独だった学生生活で、携帯番号を高校生のうちに聞かれることなど、有り得ないと思っていた。

正直、嬉しい。嬉しいのだが居た堪れなかった。貧乏な誠は携帯を持つどころか、家の電話ですら止められている始末だ。

「もしかして、持ってないの？誠くん」

「ああ、その、うち、貧乏だし。それに俺、友達いないから、別に必要なかったし」

「いいんじゃないの。携帯くらい持ってなくても。太成もつい最近まで持ってなかったしよ。それにお前、ダチいんじゃない。ここに、二人も」

「そうよ。私達、友達でしょ？」

友達。皆、生活の中で当たり前に出るもの。でも、自分には縁がなかったもの。この二人は自分の事を友達だと言ってくれている別に、自分はずっと一人で構わない。そう思っていた。友達。その響きが、こんなにも自分を感動させるなんて思ってもみなかった。

「そっか。友達か」

「おう。嫌か？」

藤井が分かりきった事を言う。

「嫌なわけじゃないじゃん。メチャクチャ嬉しい。大袈裟かも知れないけど、生きてきた中で一番」

「ホント大袈裟だね」

普通は大袈裟なのだろう。でも、彼にとっては、本当にそうなの

だ。退屈で誰も自分に干渉しない生活を望んでいた。それでいいと思っていた。自分の生活には、楽しみや喜び、それらを必要としなかった。それで、自分を傷付けるものさえいなくなるのならと。

だが、今彼に訪れたほんの小さな歓喜が、辛く押し掛ける家や学校、日常の醜悪な環境が繰り返されたとしても、その代価となるのなら受け入れられる気がしていた。

「まあ、お前、根性あるしな。そういう奴は嫌いじゃねえ」

……根性？

誠は、自分に根性があるなどと言う。

チサに続き、彼も何か自分のことを勘違いしているのではないだろうかと、誠はその言葉に軽く首を傾げた。

「ってことで、ラーメンでも食いに行かね？ 俺、さっきから腹減ってたんだわ」

「うん。いいねえ。ね、誠くん、行くでしょ？」

もう友達なのだから、誠も当然来るだろうとチサは、上機嫌に満面の笑顔を誠に向けてきた。

ただ、それに対し、すぐに返事を返してやれない自分が、もどかしかった。二つ返事で言葉を返したい。だが、食事をするための持ち合わせが誠にはなかった。

対応にあぐねている誠の気持ちを察してか、それとも、始めからそのつもりだったのか、

「金の事なら気にすんな。今日は俺の奢りだ」

と、充は誠の背中をトンと優しく叩いた。

「ホントに？ ヤッター」

「お前じゃねえよ」

「ええ、ケチイ。これでも私、レディなんですけどあ」

「分あった分あった。ほら、行くぞ誠」

誠の返事もよそに二人は公園を後にする。

「わ、待って」

ラーメンを食べ終え外に出る頃には、辺りはすっかり暗くなり、五月蠅いくらいの蝉の声は止み、変わりに夏虫達の涼しい音色が誠達を迎えていた。

色々なことを話した。誠には、そのどれも新鮮で、そのどれもが自分を楽しくさせた。あんなに笑ったのはいつぶりだろう。頬の上辺りには、ゴワゴワとその余韻がまだ残っている。その一時が楽しければ楽しいほど、時間の経過は驚くほど早く感じられ、別れが物凄く名残惜しいものにさせた。

束の間の楽しい空間は過ぎ去り、誠は、藤井とチサと別れ家路を辿る。

……楽しかったなあ。人と、友達と話す事がこんなに楽しいなんて。

友達。今日だけで、彼には二人の友達が出来た。まるで小学生だ。ただ、嬉しい。それだけのことが。変え難いほどに。高揚した。心が。傷だらけの身体も、その痛みを忘れてしまうほどに。

その友達が憧れていたうちの一人、藤井充だった。藤井は、チサの事を好きなのだろう。チサはまるで気付いてないようだった。二人共、感情が本当に分かり易い。真っ直ぐに自分に言葉を掛けてきた。他の者とは違う、上辺の取り繕いもなく。歪な感情もなく。ただ、嬉しかった。その空間に自分がいることに。独りには、慣れたはずなのに。独りとは感じさせなかったその空間が、そのひと時が、本当に嬉しかった。

……今日は楽しかったなあ。帰りたくないなあ……、家……。

11・家族

十一・家族

「ゴチャゴチャうるせえっ！ 酒買って来いっつってんだろが！」
「そんなお金、どこにあるのよっ！ 電話も止められてるし、ガスも水まで止められたら、どうするのよっ！」

「その金をどこぞの男に賣いでんのはどこのどいつだ！ あ？ 俺が何も知らないとも思ってるのか？」

「何よ！ 仕事も長続きせず、ギャンブルに酒ばかりじゃない！ あなた！」

……五月蠅い。五月蠅い。五月蠅い、五月蠅い五月蠅い……。毎日毎日、父さんも母さんも喧嘩ばかりだ。息が詰まる。辞めてくれ。お願いだから……。

布団にくるまり、きつく両手で耳を塞ごうが、両親の罵声は誠の耳を貫いてくる。毎日毎日の事だが、全く慣れることはなかった。

怒号。叱咤、罵声、つんざく音。それら喧騒は、ほぼ毎日誠を執拗に追い立てた。

仕事に就いても長く続かず、すぐに仕事を辞めてしまふ父は、ストレスですぐにギャンブル、酒に溺れた。惣菜工場でパートをしている母は、若い男に色目ついては、その稼ぎを貢込む。

稼ぎがない、そのくせ金使いが荒いため、借金だけが膨らんでいく一方だった。

その親の身勝手さに振り回されるのは、いつも子供なのだ。時には、ストレスの捌け口に酒に飲まれた父は、躰などと言い誠を殴り付けた。一方、母親は若い男と上手くいかない、その鬱憤を、煙草で彼の背中に押し付けるのだ。誠の背中は、無数の痣やら、根性

焼きの後やらで酷い有り様だった。

それでも、酒を飲んでない時の父は誠に優しい時もある。母も機嫌がいいと、昔の自分を懐かしむように語りかけ、それを誠が真剣に聞いていると、とても嬉しそうな顔をするのだ。

例え、どんな親だろうと、誠にとっては唯一の自分の父親であり、母親なのだ。誠には、家にいる時の方が、学校でどんなにイジメに遭おうが、一番の苦痛を感じる事があった。それでも、理解出来ないかもしれないが、彼は、この両親を心から愛しているのである。「誠。誠！ いるんだろ？ こっちに来い」

隣の自室で布団にくるまる誠を、父が呼びつけた。

襖を開けると、部屋には酒瓶やら割れた食器が散乱していた。そして、部屋の中央の卓袱台に突っ伏した、くたびれたカーキの綿パノに、よれよれのＴシャツ、一日中家にいたのか、白髪混じりの無造作な髪が寝癖を際立たせた父の姿があった。その手には空の一瓶が握られている。一方、色目使う男には見せないであろう、だらしのない部屋着を着た母が、もううんざりと、額を片手で抑え立ち尽くしていた。

「何？ 父さん」

「お前、酒買って来い。このババアは使えねえ」

母に酒を買って来させるのが無理と分かかってか、母に皮肉を言い放ち、父は、誠にターゲットを切り換えた。

「あなた！ いい加減にして下さい！ それにババアなんて」

「あ？ ババアはババアじゃねえか。年甲斐もなくケバい化粧しやがって」

「なっ」

母の顔は怒りに満ち、顔は赤く染まり上がる。

……なんて顔してんだよ、母さん。

それは、外では絶対に見せることのない、ましてや、色目使う若い男に見せる事の出来ない、取り繕っていない母の顔だった。その真っ赤に染めた彼女の顔を見て、父は薄ら笑いを浮かべている。

そしてその父は、誠に酒を買って来させようとするのだが、誠にそれを買う金があるはずもなかった。

「そんな金、俺、持ってない」

父は、誠にそう言うのを分かっていたらしく、鼻で笑った後、誠に言い放つ。

「分かっただよ、んな事は。ほら、こっち来い」

父は、近寄る誠の腕を掴み、自分に引き寄せると誠の顔を殴りつけるのだ。

……分かっていた。いつものことだ。父さんに殴られない日などなかった。昔から。もう、慣れていた、痛みには……。

父は決まって、最後にこうやって誠に当り散らすのだ。結局、誰よりも母の事を理解している。

「誠に当たるのは辞めて！ あなた！ 分ったから。お酒買ってくるから」

「分かったら早く買って来い！ そうやって母親ぶっても、お前も俺と何も変わりやしねえ。誠に背中の中の火傷の後、あれ、お前だろ？ 怖いもんだなあ。女つてのは」

父に言われるがまま、母は泣きながら家を出て行った。

こうやって、誠にこの二人にいつも利用されるのだ。この二人にとって、自分は、一体何なのだろう。判らない。他の親がどうかなんて知らない。誠にはそれを聞く相手もいなかった。

テレビも無い家は、その情報すら彼には教えてはくれない。誠には、ごく普通の一般家庭がどんなものなのかを、知る術もないのである。ただ、誠に暴力を振るう父は、紛れもなく自分の親なのだ。

父は、母が家から出て行ったのを見届けると、隣で力なく座り込む誠に喋りかけた。

「悪かったなあ、誠に。殴ったりして」

「うん」

本当に悪いと思っているのだろうか。毎日殴られ続けていれば、その気持ちに信憑性などまるでなかった。ただ、父がそう思ってく

れている。そう信じないと、やりきれなかった。

「仕方なかったんだ。今にでっけえ仕事見つけてくるからよ。そしてたら誠、たらふく美味しいもん食わせてやる」

「うん」

「なんだって、欲しい物は買ってやるぞ」

「うん。いいね」

無理に決まっている。分かりきっている。ただ、そうやって話す父は、自慢気に胸を張っていた。滑稽に見えるかもしれない。だが、自分の息子、誠に話し掛ける彼のその姿が、すごく嬉しそうなのだ……。

誠がこの話を聞くのは何回目だろう。時折、父はこうやって、彼に現実になり得ない未来を語りだすのである。

「そしたら、あんな女なんかと、とっとと別れて、新しく二人で暮らそう」

「別れるの？ 父さん達」

「ああ、あの女は駄目だ。男を駄目にしちまう。誠。金と女にやあ氣い付ける。この二つは、男をどこまでも駄目にし食い潰しやがる。

いい女捕まえるよ。誠」

「俺、よく分からないよ」

いい女など、今の誠には理解出来ない。金の事にしても、彼には考えたくもないことだ。

……俺はただ、父さん、母さんがもつと仲良くなったらって。そう思うんだ……。金がなくても、仕事がなくても、支えあって笑い合える家族。そんな家族だったら、幸せなんだろうなって。

その思いを、誠が口に出したとしても、逆に、それを父が理解しないのだろう。

「お前にはまだ分からんか。でも、まあ、いずれ分かる。大人になればな」

「そっか」

大人になれば。大人というのは一体何なのだろう。誠は、もう十

八歳になる。一般的には大人に近い存在なのだろうが、それでも、よく分からない自分は、まだまだ子供なのだろう。

藤井充、彼は大人だった。もう、未来の自分などを見据えているのだろうか。

……俺も、今年で卒業だし、就職先考えないと。

「誠。もう遅い。お前は寝ろ」

「うん。おやすみ」

「ああ」

父に促され、誠は眠りに付くため、自室に入り、布団を被った。

だが、誠が安らかに眠ることは許されず、また、二人の罵声や叱咤の飛び交う声や音は、誠の眠りを妨げるのだった。布団にくるまり、ただ、ただ、誠はそれが止むのを願って……。

朝。カーテン代わりの借金取りの張り紙の隙間から光が差し込む。いつものまにか眠ってしまったらしい。カーテン代わり、という捉え方は適切ではない。窓ガラスは割れているのだ。この場合、窓変わりと捉えた方が妥当だろう。

皮肉だった。借金取りの嫌がらせのはずのその張り紙は、この家には必要な物になっているのだ。

誠は、寝惚ける体に克をれるため、冷水を顔に浴びせかけ、ギョウギユウに絞られた歯磨き粉をなんとか絞り出す。赤切れした口元は、冷たい水と歯磨き粉の泡で、ヒリヒリと痛みを訴えた。

卓袱台の上には今日の昼食代の三 円。

……今日は、昼飯食えるかなあ。

相変わらず、退屈な日々と受験のストレスの捌け口に、吉井達は誠に嫌がらせをし、殴る蹴るの暴力を行使した。誠の席の周りだけ、他の席に比べ、机一つ分のスペースを造られている。菌が移るらしい。

所有物の紛失は、当たり前のように繰り返し、彼は上履きを片方しか履いていない。生徒指導の先生や担任から指導を受けるが、新しく上履きを買う金すら持ち合わせないのだ。

夏の体育の授業には水泳がある。彼は水泳の授業のとき、独りで自習を行うか、筋トレを課せられていた。

ある日、誠が水泳の授業を拒み続け、それに痺れを切らした担任が、無理やり彼の制服を剥ぎ取ったのだが、担任は彼の裸を見て唾然とした。身体中に散乱するおぞましい無数の痣や火傷の後は、担任の顔を無意識に歪ませ、言葉を詰まらせたのである。

「先生は、何も見ていない。いいな？」

と、日和見、事なかれ主義の担任は、誠に言い聞かせた。

担任は、彼がイジメに遭っている事実を、前々から知っておりながらも、日和見に黙認していた。だが、無数の痣は明らかに古いものもあり、ここ数年で出来た痣だけではなかった。担任は、虐待の実態をも無かったことにしたのだ。だが、誠にとって、それは逆に都合がよかった。

虐待について深く関わって欲しくなかった。児童相談所は、本人の意思を尊重する。虐待を受けている本人が助けを求めなければ何もしてやれないのが現状だ。彼は、両親を愛している。例え、どんなに酷い虐待を受けようが、両親は、数少ない誠の繋がりなのだ。

担任、大人達のように、自分に関わらないように接してくれた方が、誠には幾分楽に感じられた。だが、それとは逆に、クラスメイト達は執拗な嫌がらせを彼に捲し立て、絡んでくるのである。尽く、鬱陶しい程に。菌が移るなどと敬遠しつつ。それならば、近づかなければいい。だが、相手から滲み寄り、誠を責め立て、醜い心の醜態を晒してくるのである。

……メンドクサイ。関わらないで欲しい。

どうせなら、自分の事を空気扱いしてくれた方がよっぽど良く感じられるというのに、彼等が、何をしたいのかが解らなかった。自分の事を忌み嫌い、触れたくないのなら、そのまま、疎外してくればいいものを。

ただ、それでも変わったことがある。藤井の影響を受けてか、誠は吉井達に金を一切払わなくなったのだ。その分、嫌がらせや、暴力は前にも増して誠の身に降り掛かるのだが、それでも誠は、それに耐え、金を払うようなことは決してしなかった。

放課後、誠は時折、藤井と下校を共にするようになっていた。

「相変わらず、お前え、いつもボロボロだな。ホントにいいのか？俺がそいつ等、シメてやるつつてんのに」

いつもボロボロの誠の姿が見るに耐えないのか、藤井が誠を気遣う。

「いいんだ。これは自分の問題だし、もし、藤井君が仲介して奴等の暴力が収まったとして、それは表面上に過ぎない。見た目じゃ分からないように嫌がらせは続くと思うし、結局これは、自分自身でなんとかするしかないんだ」

正直、自分の事をこれだけ心配してくれる人がいる。誠は、それだけで本当に嬉しかった。

「そんなもんかねえ。でもまあ、はい。お願いします。って二つ返事で助け求めてくる奴はあまり好きじゃねえしな。やっぱ、お前強いわ。さすが俺のダチだ」

「強いとか弱いとか、よく解らない。けど、藤井君は俺の事買い被り過ぎだと思っ」

「お前は、自分の事謙遜し過ぎなんだよ。人に頼らず自分で何とかしようってのは弱い奴には出来ねえ。もっと自分に自信を持って」

……自信を持って。か……、俺に持てる自信はあるんだろうか。

藤井が、どうしてこんな暗い自分の事を友達だと言ってくれるのだろうか、誠には実感が持てないでいた。何より、話を聞くほど藤井の周りには、自分とはまるで正反対とも言える人ばかりで、自分と彼等とでは、居場所が違う人間ではないのかと思えたからだ。

藤井は、よく自分の周りの仲間の事を誠話してみせた。その話はどれも新鮮で、誠は彼の話聞くのが好きで、それが日々の楽しみになっていった。

「……でよお、その時太成の奴がさ、思いっきりチサに殴られてやんの。殴られた太成が一向に起き上がらないからよ、殴ったチサの取り乱し様って言ったらよ……」

藤井は長身の長い手を、身振り手振りして、爽やかな満面の笑顔を造り誠に喋り掛けている。彼は、本当に楽しそうに自分の友達の事を話してみせるのである。藤井が話す中には、必ずといって柚木の名前が出るのだ。この二人は本当に仲が良いのだろう。

「……な？ おもしれえだろ、太成。お前にも一回会わせてえなあ。太成も絶対お前の事気に入るって」

藤井は、足を引きずる誠の歩くペースに合せ、喜々と話を続けた。こういう、さり気ない気遣いも、彼の思いやりのある優しさを誠に感じさせた。

……柚木君かあ、会ってみたいな。藤井くんの話聞いてたら、めちゃクチャ面白そうだし。でも、怖そうだな。なんてったって、あの大滝二強の一人だし。ていっても、藤井君がその残りの一人なんだよな。

新しく人と話してみたい。こう思える日が来るなど、誠は思ってもみなかった。彼の中の世界が少しずつ変わって行く。それが誠にと

って、初めて実感出来た幸せだったのかもしれない。

「会ってみたいな。柚木君に」

「ああ。あいつは正義感強くてな。お前だったら良い友達になれるさ」

「そっか。楽しみだな」

「おう。じゃあ、今日はここまでな。甲斐の野郎が二人で話したい事があるらしくてよ。お前にも、甲斐のこと会わせてやりたかったし、そう言ったんだけど、どうしても二人で話したいなんていいやがる。俺はそっちの気はないんだけどよ。すまねえな」

路地の十字路に差し掛かると、藤井が冗談を混ぜつつも、誠に申し訳なさそうに弁明した。

「はは。気にすることないって。らしくないよ」

本当にらしくない。自分を氣遣ってくれるのがよく分かる。

おそらく藤井は、今まで友達がいなかった誠に、少しでも友達を持つ喜びを知って欲しいのだろう。彼のそういう優しさが、自分のせいで気を使わせてしまっているように思えて居た堪れなくなる。

「おう。次は太成も読んでよ。俺とお前、チサ、四人で一緒にラーメンでも食いに行くか」

……柚木君も含めてラーメンか。きっと、皆で食べるラーメンは美味いんだろうな。

「うん。楽しみにしてる」

藤井は誠の返事を聞くと、

「おう。またな」

と、手をひらひらさせ、商店街の方の道へと身体を向けた。

「あ、藤井君」

「ん？ どうした？」

不意に誠に呼ばれ、藤井は商店街へと向かう足を止め、振り返った。

「あ、いや、気を付けて」

「はは。可笑しなことを言うな、お前は。毎日ボロボロのお前の方

が一番気が付けろよ」

「それもそうだよな。じゃあ、またね」

「ああ。またな」

毒気を抜かれたような面持ちで、藤井はまた同じように手をひらひらさせ、商店街に去って行くのだった。

……どうして、気を付けてなんて言っただらう。

何故か分からなかった。ただ、ふと不安が過ぎった。

自分の生活の中で、掛け替えのないものとなったこの楽しい一時、それを失う怖さが自分を臆病にさせているのだろうか。誠は何を気に病むことがあるのかと、樂觀的に自分に言い聞かせ、過ぎる不安を取り除く。

だがこれが、誠が藤井を見た最後の姿だった。

13・死

十三・死

藤井充が死んだ。

甲斐に呼ばれたと言い、商店街に向かった藤井は、その後、甲斐と一緒にいるところを清門高と名乗る者等に、後ろから鉄パイプで頭を殴られたらしかった。軽傷だった甲斐は警察の事情聴取、事次第を聞きつけた、チサが病院に向かったのだそうだ。

緊急手術を終えたものの、入院中、容体が悪化した藤井は、懸命の医者への対応も虚しく、死に至ったのである。

……何も知らなかった。ホームルームで先生に聞かされるまで。藤井君がどうして……。

誠には実感がまるで湧かない。学校帰りの今にも、「よう、誠」と藤井が声をかけてくるのではないだろうか。有り得ない。藤井は、もうこの世にはいない。有り得ない期待を膨らませ、誠は時折、後ろを振り返り藤井の姿を捜すのだ。彼はまだ、充がいなくなったという現実を受け止めきれないでいた。

……なんで、藤井君なんだ。あんなに元気だったじゃないか。ラーメン食べに行くんだろ？ チサさんと柚木君も連れて。どうしていなくなったりするんだ。

友の死を受け入れきれない誠は、藤井と約束したことを、もうそれに答えることが出来ない彼に問い掛けるのである。

藤井と友達になってまだ幾何も経っていないというのに、誠に自分でも驚くほどの辛さが押し掛る。それに比べ、小さい時からずっと一緒だった幼馴染を失ったチサは、どれ程の辛さを抱えているのだろうか。

藤井が襲われたのは誠と別れた後、甲斐と商店街で。あの時、ふと、虫の知らせがしたのを覚えている。ほんの小さな予感だった。だが、藤井の死がその後を訪れるなど予想出来ようがない。

……俺は甲斐君に会ってみたいって、無理にでも藤井君に付いて行けばよかった。そしたら、藤井君は死なずにすんだかもしれない。

誠が鉄パイプを持った相手に何か出来る訳ではない。それでも、鉄パイプで殴られる可能性は自分にもあったかもしれない。そしてその結果、死んでいたのは自分だったとしても、藤井が死んでしまふより、そうであった方が余程良かったのではないだろうか、誠はどうしようもない後悔を、何度も何度も頭に巡らせるのである。

誠は、途方も無く歩いていくと、気付けば藤井と初めて会った公園に来ていた。彼は心の拠り所として、この公園を無意識に求めていたのだ。

ベンチに腰掛け、誠はただ、このまま日が沈むのを待っていてようななどと思った。夕方の公園は、小学生程の子供達が所狭しと遊び回っている。それとは裏腹に、誠のいる空間だけが、まるで別世界にしているような錯覚を覚える。時間があつという間に過ぎ去るようで、それでいて、ゆっくりと流れている感覚。時には、時間が止まっているようにさえ感じられた。

ふと気付けば、誰かが忘れていったのか、ベンチの脇にある煙草が目についた。その箱の中には、数本の煙草とライターが入っている。

……藤井くんと同じ銘柄だ。美味しいのかな。

藤井と同じ銘柄の煙草を吸えば、少しでも彼に近づけるような気がした。誠は、見よう見まねで煙草を啜えると、ライターで火を付けた。

「ゲホッ、ゴホッ」

生まれて初めて吸い込まれた煙草の煙は、肺に拒絶され、誠は酷

く咳き込んだ。咳き込むほどに、肺に残った煙は誠の喉を刺激し、喉が悲鳴を上げる。彼に啞えられていた煙草は、音も無く地面に落ちていた。

泣けてきた。藤井がよく吸っていた煙草、それにさえ拒絶されたようで涙が溢れる。藤井の死を聞かされて、今まで、不思議と誠の目に涙が流れる事はなかった。だが、一度流れだした涙は、もうどうしようもなく止まらない。受け入れきれなかった現実、煙草によって思い知らされ、友を失った悲しさを背負いきれず誠は人目も憚らず嗚咽した。

……友達と言ってくれた時、本当に嬉しかった。それなのに……藤井やチサ、彼等と過ごした日々は、ただ毎日を作り過ごしていた誠に幸せを与え、生きる希望さえ抱かせた。本当に楽しかった。本当に嬉しかった。それだけに、それを失った今、計り知れないほどの哀しみが彼に降り掛かる。

嗚咽し、唾を飲み込む度に喉は痛みを訴える。それでも涙は止まらない。両手の甲で涙を交互に拭う。ただひたすらにむせび泣き、鼻水、ヨダレを垂らした。辛くて、哀しくて……。

そして、その彼の足元では、落とした煙草が無情に煙を上げていたのだった。

……明日、藤井くんの葬式がある。ちゃんと別れを告げなきゃ。

葬式場には藤井の親類始め、クラスメイト、仲の良かった友人等が参列し、各々が藤井の死を悲しんでいる。

チサは目を腫らし、その友人と共に涙に暮れていた。初めて経験する葬式は、悲しみに溢れている。皆、失った藤井充の悲しみに涙する中、当の本人の遺影は、清々しい程の笑顔で中央に置かれている。

遺影の写真の笑顔が余りにも生き生きとされていて、それがより一層、誠を悲しくさせた。

と、式場の入口が騒がしくなる。藤井の両親達か誰かと揉めてい

るようだ。

「……来た。お前等が充を……返せ！」

よく聞き取れない。

「柚木くん」

チサが入口へ掛け込もうとするが、藤井の親類だろうか、中年の男がチサを足止めした。

「行っちゃ駄目だ」

「だって、柚木くんが」

納得出来ないチサは必死に男に訴えかけた。

「すまない。でも、察してやってくれ」

男は、チサの気持ちが解らないわけではないため、その表情は苦悶に満ちていた。

「でも、充くんが死んだのは、柚木くん達のせいじゃないのに、そんなの……」

「仕方ないんだ。充君の両親もそれは頭では理解している。だが、一人息子を亡くした悲しみを誰かにぶつけるしかないんだ。例え、その友人が充君の死に何の関係もなくても」

「そんなの……、だって、おかしいよ。親友なのに……」

チサは、その場に力なくしゃがみ込み泣き崩れた。

納得出来ない。そんなのは間違っている。親友の見舞いも許されず、葬式でさえ参列させて貰えないなんて、余りにも悲しすぎる。

チサは本人達の意味を無視した、両親の行動に納得がいかなかった。

……チサさん。

誠は、そのやり取りを終始、握り拳に力を込め、ただ黙って見ていることしか出来なかった。

その後、葬式はしんしんと進み、充の眠る棺桶が中央に開かれる。式場のスタッフが花を参列者に配っている。

まず、家族、親類からその花を棺桶に供え、藤井との最後の別れを迎えていく。安らかに眠る藤井の周りに、色鮮やかな花達が敷き

詰められていく。悲しみの嗚咽が式場に響き渡る。

誠は、もう目覚めることのない藤井の姿を見ることが出来ず、その場から動こうとしない。彼にはもう動かない藤井を目の当たりにし、現実を受け止めきる自身がなかったのである。棺桶は静かに閉ざされ、遺族達の手により霊柩車の中へ運ばれた。

両手を併せ、悲しみに泣き濡れる者を後に、霊柩車は追悼のクラクションを重く鳴らし親類と共に火葬場へと向かって行ったのだった。

結局その日、誠はチサに声を掛ける事が出来なかった。ただ下唇を噛み、泣かないようにするだけで精一杯だった。

沢山の人達が泣いていた。誠は改めて、藤井が皆に好かれていたことを実感した。皆、それぞれが藤井のいなくなった悲しみを抱えている。チサも、家族も、友人も。最後の別れをさせて貰えなかった柚木はどんな気持ちなのだろうかと、誠は、まだ話したこともない藤井とチサの親友のことを思った。

……親友なのに……。

藤井が生きていれば、自分に紹介してくれるはずだった柚木は、誠の憧れだった。彼は、藤井の話の対象として毎回その中に存在していた。例え一緒にいなくても、二人には繋がりのようなものが感じられたのだ。それが絆というものなのだろう。二人はいつまでも一緒なのだろう思っていた。

……こんなの、藤井君も柚木君も可哀想すぎるじゃないか……。

14・決別

十四・決別

悲しみに更ける時間さえ、誠を取り巻く環境は許してくれず、家に帰れば夫婦喧嘩は日常に行われ、時に彼へ飛び火さえもたらし誠を苦しめた。また、学校へ行っても彼へのイジメは日を増すにつれ、よりエスカレートしていた。彼には、この者等が一人の人間が死んで悲しみに暮れた人達と、同じ人間とはとても思えなかった。

理解出来なかった。誠を虐め、嘲る者の中には、葬式に参列し藤井の死に泣いていた者もいる。式場でそれを見た時、彼はこのイジメをしている者に対し、僅かでも人間味を感じていた。それに虐げられる自分は、もしかしたら人間以下なのかもしれない。

それに付け加え、自分に降り掛かる苦しみ、痛みが誠に余計に生を実感させる。それに対し、その痛みさえ感じられなくなった藤井充、その死をより一層実感させた。それらは、誠に悲しみの根をより深く張っていくのだった。

「誠くん、今帰り？」

後方からの自分を呼ぶ声に振り返ると、そこにはチサが両手を後ろに鞆を持ち、涼し気な顔をしていた。

「うん。チサさんも？」

チサと会話をするのはいつ振りだろう。誠は、それが随分と久しぶりな感じがした。話したい事は山程ある。ただ、どう切り出しているか分からなかった。涼し気な顔をしてはいるが、チサはどこか無理をしているようなのだ。

「うん。なんだか、久し振りだね」

「うん。そうだね」

相槌しか出来ない自分がかどかしい。

「ちよつとさ、公園行つてみない？」

「うん。俺、あそこ落ち着くんだ」

「誠くんも？ 私もそうなんだ」

少し嬉しくなる。チサと藤井、二人に出会ったあの場所が、自分と同じように、彼女にとつても落ち着ける場所だと言うのだ。人と共感しうる事が、それが彼にはとても嬉しかった。

「じゃ、行こうか」

誠が言うと、チサは静かに頷いて一緒に公園に向かう。

公園までの道程、心配していたほど会話は途切れることもなく、二人は公園に辿り着いた。どちらかが先導したわけでもなく、二人共、足が自然と最初に出会ったベンチに向かつていた。

二人がベンチに腰を掛けると、誠はいよいよ言葉を詰まらせた。

二人共、藤井充を会話に出すことを避けていた。だが、藤井に関して彼が、いや、この二人がいつまでも会話を避けて通れるはずもないのだ。誠は静かに切り出す。

「ここだね。俺達が初めて話したの」

「そうだね。あの時は大変だったんだよ。誠くん気失つてて、公園まで充くんが誠くんを背負ってきてくれたんだよ」

「うん、感謝してる。優しいもんな、藤井君」

……重かつたろうな。俺、ガリガリだけど、あの場所から公園まで随分と距離がある。

「うん。でも、可笑しかったなあ。充くんが誠くんを膝枕なんかしちゃって」

「あの時はビックリしたな。男に膝枕つてのもだけど、その膝枕してる男が有名な藤井くんだったから」

「そうだね。今思えばあの時の誠くん、相当キョドってたもんね」

そう言つて、チサはついこないだのことを随分昔の事のように懐かしむ。そう、実際、誠達は出会って一ヶ月も経っていなかった。

「俺、初めてだったんだ。友達出来たの」

「うん」

「本当に嬉しかった。幸せだった。二人が友達って言うてくれて」「うん」

チサは涙を浮かべ、誠の話に静かに耳を傾けている。

「悲しいけどさ、藤井君は幸せ者だなんて思えるんだ」

「どうして？」

静かに聞いていたチサは誠に問掛けた。

「藤井君には、こんなに自分のために悲しんでくれる人達がいて、仲間に囲まれて」

「そんな訳ないじゃん。充くん死んじゃったんだよ？ もう、その友達と笑ったり、泣いたりも出来ないのよ」

チサは誠の発言に少し苛立っているようだ。

「ごめん。ただ、俺は藤井君がいなくなっても、皆の中にはちゃんと藤井君が息づいていて、柚木君も藤井君のために血眼になって、寺田って人捜してて。それで……」

「どういうこと？ 太ちゃんまで出して。太ちゃんはもう寺田って人の事は関わらないって言ったのよ。私と約束したの。それなのに、どうしてそんなこと」

「いや、その、柚木君は親友の藤井君のことを思って、それに、チサさんのことも……」

「あなたに私達の何が分かるって言うの？ 分かったような事言わないで！」

「ご、ごめん……」

怒らせるつもりはなかった。ただ、少しでもチサを元気付けようと誠が取り繕った言葉は、元気付けるところか、逆に彼女を怒らせてしまったのである。

実際、幸せだったかなんていうのは、本人にしか判らない。それでも、誠は、藤井君に対する沢山の人達の思いを目の当たりにし、自分にこれまで屈託のない笑顔を見せていた彼は、幸せだったのではないかと思えたのだ。

……そうだ……。俺に何が分かるっていうんだ。友達になって一

ヶ月も満たない俺がいい気になって、友達ぶって分かった風な事言
つて。

「ごめん。私帰るね」

「ま、待って……」

チサは誠の静止を振り切り、走って帰っていった。

取り残された誠は、ただ、呆然と立ち尽くした。自分から立ち去
ろうとするチサを止めようと伸ばした右手は、何も留めることも出
来ず、虚しく空に浮いていた。

……どうして、ねえ？ 藤井君、どうしてだろう……。チサさん、
俺に笑顔で話かけてたけど、凄く辛そうだったんだ。だから、元気
出して欲しかった。だって、友達だから……。

『あなたに、私達の何が分かるって言うの？ 分かったような事言
わないで！』

チサの最後の言い放った言葉が、誠の頭に木霊する。

……俺には分からないのかな？ 友達の接し方なんて分かんない
よ。だって、初めてだったんだ。友達が出来て嬉しかったんだ。友
達亡くして悲しかったんだ……。

「ごめんね、チサさん……」

誠は、やりきれない思いを独り呟いた。

……また、一人になっちゃった。いや、もともと俺はいつも一人
だ。そうして今まで生きてきたんだ。これからだって……。たった
一ヶ月も満たない短い友達くらい、失くしても全然平気だ。平気な
んだ。平気の……。はずなのに……。

……どうして、涙が止まらないんだろう……。

その夜、家に帰って自室で冷静さを取り戻したチサは、誠に関情的になってしまったことを後悔していた。

……どうして、私、あんなこと言ったんだろう。

気が滅入っていた。充の死に。誠が自分を励まそうと、元気付けようと言葉を掛けてくれていたのは、今になって痛いほど痛感出来る。ただ、柚木の名前が彼から聞かされたとき、胸に畝ねるものがあった。彼女は知らなかったのだ。寺田のことはもう干渉しないと書いた彼が、未だに寺田を追っていたことを。それで、気が動転してしまった。ほぼ八つ当たりだった。

そして、充の死で誰もが嘆き苦しんでいるというのに、その場に不釣合いと彼女には思えたのだ。「幸せ」、という言葉が。

どういう気持ちで彼がそれを言ったのか、理解しようとしてもしなかった。ただ、闇雲に抱え込んだ悲しみを彼に吐き出した。彼の目が、余りにも澄んでいたから……。

……明日、誠くんには謝らなきゃ。

15・ホウカイ

十五・ホウカイ

皮肉な事に、誠にとって初めて公園で出来た友達は、その公園で終わりを遂げた。友達としての期間は、たった数週間だった。

……そう、たったの数週間かじゃないか。

誠は、何度もそう自分に言い聞かせた。

初めての友達は、他人で初めて自分に深く関わり、たった数週間という期間であっても、誠にその掛け替えのなさが重く押し掛かる。今まで、人生に闇ばかりを見てきた誠は、彼等と出会って、初めて生きてくことに光を見出していた。それまで、ただ繰り返されてきた毎日は、彼には絶望でしか無かったのだ。明日に希望など持てなかった。

ところが、彼ら友達という存在との出会いで、誠は、明るいこれからの夢見るほど、訪れる未来に希望を持てるようになっていたのだ。だが、彼はその友達も失ってしまったのである。

初めて友達が出来、友達を亡くし、友達を失くす。その出来事に、誠の心は耐えきれずに悲鳴を上げる。それがこんなにも辛いなんてこれならいっそ、始めから友達などいかなかったならよかったのにと、彼は、その出会いですら否定しようとした。

気付いていた。幼い頃から。希望を持つと、それを失くしたときその何倍もの絶望が待っていることを。だから、誠は、何も求めてこなかった。そうやって傷付いてきたのだから。だが、頭で理解していようとも、心が意思に反してそれを求めてしまったのだ。人と
の触れ合い、温もり、愛を……。

……もう、そっとしておいて欲しい……。

誠は、このまま家に帰れば頭がおかしくなりそうだった。そう、

家ではまた、あの二人が喧嘩しているに違いない……。

……お願いだから、今日はそつとしておいて欲しい……。

誠は、涙も乾ききぬまま、玄関のドアを開けた。

「ただいま」

中は真つ暗だった。まだ、父も母も帰ってきてないのだろうか。

窓から差し込む夕日の陽の光を頼りに、誠は薄暗い部屋の電気のスイッチを探る。

夕方の薄暗い部屋に電気を灯そうと向かった先で、彼は、現実とは思えない惨状を目にするのだ。

ドクンッ。

「な、何だよ……、これ……」

全身が凍りつく。呼吸が出来ない。景色が有り得ないくらいに歪む。吐きそうになる。心臓が痛い。締め付けられている。苦しい。

苦しい。クルシイ……。

ドツドツドツドツ……。

「おかえり。誠」

母が誠に優しく答えた。

「何……してんだよ……、母……さん……？」

苦しい。息が出来ない。声が思うように出なかった。顎はガクガクと震え、自分の絞り出す声が、ちゃんと喋れているのかすらも判断出来ない。

景色の歪みは途端、目の前が真つ赤になり、背景はモノクロに変わる。視界に捉えたそれは、尋常じゃなく歪なものだった。

そこには、真つ赤な血を畳一面に流し染め、動かなくなった父と、血の着いた包丁を両手に持ち、座り込む母の姿があった。

……何だよ。ナンダヨ、これ……。ナンデ、ナンデ母サン、笑ッテルノ……？

誠は、自分がまるで異世界に迷い込んだのかと錯覚さえ覚える。

酷い錯乱状態にある彼に、母は相も変わらず歪な笑みを浮かべ、優しい声で言うのである。

「この人ね、またお酒飲むのよ。もうお金ないから辞めてって言うてるのに。そしたらね、この人、またお母さんの事殴るの。だからね、お母さんね、お父さんの事……、殺しちゃった」

……何、言ってるんだよ……。オカシイだろっ！ だからって、夫婦じゃないか！ ねえ、父さんなんだよ？ 俺の……。俺の、父さん……。

誠には理解出来ない。今、何が起きているのか、何故、母が父を自分の夫を殺しておいて笑っていられるのか、理解出来るわけがなかった。

今日だって誠は、いつものように訪れるであろう夫婦喧嘩に悩まされるだろうと思っていた。しかし、そんな彼の心情も他所に、目の前には、変わり果てた父の姿と、血の着いた包丁を両手で持ち、父の前で座り込む母が異質な空間を造り上げていたのだ。その包丁からは、さっきまで、父の身体の中を流れていたであろう血が、ポタポタと畳を汚している。

平凡でのどかな日常ではなかった。なかったが、誠にとっての日常は、突如として異常なものへと姿を変えてみせたのだ。

「こ、殺して……、母……さん……？」

「もうね、お母さん疲れちゃった。お父さんも、借金も、あの男の事も……、……アナタも……」

「あ……ア……」

声が出ない。息が出来ない。何も考えられない。解らない。もう、何も……。

……「アナタも……」って何だよ……。俺の事？ 解らない。ワカラナイ……。

「ねえ……、誠……、一緒に死にましよう。誠も清々してるんですよ？ 暴力振るうお父さん、いなくなつて」

「何、言ってるんだよ……、母さん……、死ぬ……とか言わないでよ……母さんが死ぬなん……い、嫌だ……よ……」

……嫌だ。イヤダ……。父さんも死んで、母さんまで……。

「何言ってるのよ。今更。ずっと死んで欲しいって思ってた癖に。アナタの私を見る時の目。汚らわしいものを見るように……。お母さんの事軽蔑してたんでしょ。ずっと憎らしかったわ。アナタのこと。アナタのその目が」

母はあるうことが、自分を誰よりも愛する息子に向かい、憎らしかったなどと言い、誠に包丁の先を向けたのだ。

……え……？ 母……さん……？

母の言葉、動作、一つ一つが彼の思考をガタガタに崩壊させる。最初の一見で既に彼の思考は崩壊し、止まっていたというのに、母の言い放つ一言一言、行動は、彼の止まった思考を突き動かしては、停止させるのだ。

耐え切れない。視界から飛び込む絶望。愛する母からの言葉の絶望。愛する者を失くす絶望。それらが誠の全てを蝕む。もう頭も心も、うねうねと混沌に乱れ狂っている。それというのに、母は、さらに彼に追い打ちを掛けるのだ。

「アナタのせいよ！ 全部。こうなったのも。お父さんも最初は優しかったのに……。アナタがいるせいで……」。

アナタなんか産まなきゃよかった。ねえ、お願いだから死んでよ！ どうせ、誰からも必要とされてないでしょ？ 誠はこの世に必要な人間なの！ 誠は、この世にいちやいけない人間なのよ。要らない人間なのっ！ だから、ね？ お母さんと死にましょ？ 一緒に……。お母さんが手伝ってあげるから」

真っ白だ。モノクロだった背景がスツと真っ白になる。自分の身体が存在さえ実感出来ない。もう、母親の姿も線で見えなかった。

誰よりも父を、そして母を愛していた。その父は死に、その母は、自分を産まなければよかったと、要らない人間だと言うのだ。そして、死んでくれと……。

ただ誠は、今死んだら、本当に楽になれると思ったのだ……。もうこの世は、彼にとって絶望でしかなかった。

母の言う通り、自分は要らない人間なのかもしれないと、誰も自分のために悲しむ者などいないだろうと、うねうねと蠢いていた彼の中には、絶望に空々（からから）と軽くなったのだ。

……誰にも必要とされてない俺が、誰かを必要とすること自体が間違ってたんだ。……それでも俺は、父さん、母さんが必要だったんだ。大好きだったんだ……。

「そっ……か……、そうだね……。ごめんね……。母さん……。俺、生まれてきて……。ごめんね……。」

誠の目から溢れる涙が頬をつたったその時だった。

「アナタは……。どうして……。」

ブシュッ！ 母の喉から鮮血が迸る。

……母……さん……？

「母さん！ なんで！ 母さんっ！」

誠は、母の首から流れ出る鮮血を両手で必死に押さえ込む。だが、止まらない。止まらないのだ。必死に、必死に抑えても、愛する母の血は誠の指の隙間から次々と流れ出る。

「母さん！ 死なないでよっ！ 俺がまだ生きてるじゃんか！ 母さん！ 母さんっ！」

両手できつく抑えても、流れ出る血は誠を赤く濡らし、真紅に染め上げるばかりで止まってくれない。彼はその母の血を、すくっては裂けた喉に押し戻そうとする。何度も、何度も。必死で掻き集め、何度も何度も、ただひたすらに裂けた喉に血を押し戻す。

だが無情にも、母の血は止めどなく彼の全身を真紅に染め上げていく。

……アア……。止まらない……。イッパイ出てくる。ああ、止まっつてよっ。どうしてっ、止まらナイヨ……。

母は、血のアブクを口から流し、呼吸をする度、ヒューヒューと音を鳴らすのだ。

……ナンダヨ。コレ。止まれよ……。トマレッ！ トマレヨッ！

……タスケテヨ。ネエ！ ダレカ……。母さんを……。母さんを助けてよっ！

ヒューヒューと音を鳴らしていた喉の音は、次第に弱まってく。

そして、誠がどう願おうが、どう望もうが、母の生命の呼吸音は静かにその音を無くしたのだ。

母は、帰らぬ人となった。だが、誠がそれを受け入れられるわけもなく、もう死んで動かなくなった母の血を、彼はただ必死で止めようとするのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8602z/>

零

2012年1月15日00時47分発行